

501

# 庫文育教

特 221

578

## 學 術 技 育 教

著 成 德 木 鈴



1

兌 發 堂 學 光 京 東



\* 0040520000 \*

2

0040520-000

特 2 2 1 - 5 7 8

教育技術学

鈴木徳成・著

光学堂

昭和 5

AHA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



特221  
578

# 庫文育教

學 術 技 育 教

著 成 德 木 鈴

1

兌發堂 學光 京東





## 自序

一、型。人生は型である。それなるが故に教育は技術であるといふ超論理の具體を本書によつて見て欲しい。マイノングが意識内容を研究するために——意識を超越する対象としての客観を探ぐるであらう程に見られ易い「対象論」を説いた或る暗示を味つても「型」こそ、より内観的なものなのです。

型の本質を私は認識以前の意識に基調させてみる。私と対象との對立を知らない意識は只「内容」のみで、その内容が——自らも知らないで表現されてゐる相、それを私は型といふのです。この状態を「意識せざる意識」として本書の底に一貫の流れを清くしてゐるつもりでございます。(意識は思惟だといふことは勿論ですが)

一、「主(客)観と客(主)観」から直ちに「洗濯の逃走」に移つてゐる直観の姿なる型をみて下さいませ。この姿を背景にもつてこそ「矛盾理肯定」といふ思惟による認識も生れます。型はより深いだけ、それだけ矛盾の相を示すのです。内在的に關聯統一されてゐるもの程外形的に



は矛盾の型を表現する。

自然と理想、道徳と藝術、個性と一般、野性と人格、教師と児童、特殊と普遍、組織と偶然等はすべてこの型を基調としての思惟による認識（人生）なのです。

教育論の外形的矛盾を見ませう。

デイルタイ派のスプランガアは生命哲學（價值を超越した形）者でありながら價值哲學を禮讃して尙一部現象學へ走つてゐる。ナトルプはベルグソン派の純粹持續の世界を認めてゐる。フツサールの現象學に於てすら價值を認めてゐる。アプリアリなるものを論理的認識のものとしなないで「作用」の中に見てゐる矛盾こそ私が現象學的教育論へ反逆的禮讃をする所以である。精神現象はその中に對象を含む——即ち意味を指示した特殊な作用で、對象はその働の中に内在するとブルントノは言ふ。對象は内在として意識に對立しない内容——直觀の意識である。ボルツァーノの復興によるフツサールは現象學を本質の學として、内容、對象、作用の三者の區別の起らないの立場に於て純粹意識の直接の姿に憧憬する先驗的なカントへ向つてゐる。

ト派に基調する教育論の矛盾、

イースプランガア（新カント派に基調する教育論が全く行詰つて文化教育學が眞の教育學であると思ふのは矛盾の

いを知ら  
だ。）

フツサール一派の現象學に基調する教育論の（現象學的な教育が最も新しくして他の思潮は全く不要だと思ひ違ひ易い教育者では困るのです。）それ等は矛盾してゐるが故に存在してゐる。

私の本書に於ける矛盾をごらん下さい。

意識を尊ぶ故に「意識あるものゝ意識なき美」といふ。

砂丘、月、潮、波、月見草、蔭、谷間の百合、峠の鈴らん、星、——自然の美しさは意識がないからだ。しかし、意識あるものゝ意識なき美は極致です。

組織を願ひながら「無意識な偶然」を尊び、教育學を奴隸學と見立てながらその美學的立場でもあり得ること。教育が児童のためであればある程教育論は教師の臍の問題である教師論を中心にしてゐる。

それなるために教育技術學こそ教育人生論、教育改造論ではあるまいか。

一、歴史にのらぬ人々 とは一つの立場への象徴である。象徴をこそ技術とみる私の人生論です  
一、特殊な角度の群。この手紙によつて私は狂亂してゐてよい筈です。脱稿後は亦一冊の日記が送られて來ました。



意識を失つた私の手紙をみて下さいませ。

一、音楽のある教育の風景畫こそ教育論への象徴としての技術です。

内觀に土下座する宗教が、何故、鐺、鉞、鈴を、さては法螺貝木魚まで用ふるか、香をたき蠟燭を灯す——それよりも佛教の存在を奇としないのはどうだ。幼兒を眠らすために子守唄の存在は如何。

人格や魂の尊さを願ふもの程感覺的であるといふのが人生の技術であることなのです。人生を否定せんとするニヒリストが「死にも得で——人生の慾望に苦んでゐるのは、それ自身ニヒリズムの實在なのです」。慾望を全否定の形で肯定した眞宗こそ立派な人生技術者なのです。

素朴な技巧や見榮を技術といふではありません。生命的な技術であることを味つてもらふために私は「意識なき技術」の理會をお願ひします。

不言之教、無爲之益、天下希及之。

無爲而無不爲。無爲を爲さざる意味に解するは素朴な寫實派の教育風景畫であつて、最もよく爲すの極致を意味する技術を「無爲」とする。

知者不言。知不知上。不言は知るの極致的技術、不知は知の最上技術である。

技術の本質を表現とする限りに於て——表現は最も特殊を希ふのである。見小曰明。

小とは關聯の上なる特殊の形である。

西行は——世を捨つる人はまことは捨つるかは、捨てぬ人こそ捨つるなりけれ。と人生の技術をのみ込んでゐます。

より感覺に生きやうとする技術者こそ、感覺に執着し通して實は感覺から淨化してゐる。

西行は言ふ。

「私は世を捨てたことがない。歌を詠まうと意識したことがない。それでゐて念佛の數より歌の數が多いのは、つまり魂の光が歌となるのだ」と。即ち

清らかなる魂（内容）といふだけでは人生ではないことなのです。その魂が歌となる（技術）ことこそ人生なのです。一見ニヒリストに見える西行の意識なき（歌を詠まうとしたこと無き）魂の光が歌（形）となる技術こそ私の謂ふ意識なき技術で眞實に感覺に根ざす人生なのです。

飾りは内容に即して光る技術です。内容以上の形は技術ではない、しかし内容のみでは内容ですらあり得ない、人生でないのは當然です。

眞實に魂へ行く道（文化）は感覺（形）からの技術なのです。錯覺の多い眼、噂さや秘密を聞



きたがる耳、霜焼になり勝ちの手、びつこの足——無いことを願ふ程のそれ等に即した行き方こそ人格を生かすのです。人形遣ひが人形なしに己の生命を表現し得ないやうに。

一、人格教育、社會教育、個性教育、何よりのことであるが、教育が兒童の内在于伸展に基調するとは言へ「教師」(被教育者からの感覺的實在でもある)を必要とするところにすでに教育は技術學である決定をもつ。教師の人格によつて兒童の人格を云々することはそれ自身技術である。たとへ教師のない兒童が内なる力で伸展するとしても、——表現に即した技術なのである。

教科書、校舎、二十坪の教室——それが蒼空や青草の原なる自然の懷で學び得ない味をもつてゐる技術の材料である。圖畫や手工が技術教科であるといふ以上に修身や歴史が最上の技術教である。本書を修身教育改造論としてもよいのです。

教師と兒童との間の最も交渉の多い言葉、言葉が内から外への「形」……表現である以上當然言葉も技術である。感覺され得る言葉であるからこそ人格の光である。

教育の問題が魂の問題であるならば、兒童の尊い個生と教師の人格とを基とする相互關係は交渉技術によつて教育は可能となる。

技術は當然意識の問題に連る。意識しすぎることは却つて人格を腐らせることもあり、技術が

飾りとなり易いのである。最も尊い人生的技術は「意識なき技術」といふ立場の技術がよく意識を生かすのだ。温い意識は、意識せざる意識といふ全能力の場合で——教育に於ては教師がクレオン、兒童が紙といふ交渉に機械化の形式を現出することだ。従つて立派な教育では教師が奴隸である代りに、兒童は無邪氣な人形である。私の考へではそのときが一番生きた意識による人生だと言ふのです。即ち奴隸學としての美學こそ教育論のあらゆるイズムは根本的に可能である。幸に私自身も知らないであらう本書の技術の御批評下さいませ。

小さな砂丘の町にて

著 者 識







目次

一、主(客)観と客(主)観……………一

二、洗濯の逃走……………四

三、「共」は一……………二  
——意識されない意識——

四、不思議な機縁での觸發……………一四

五、全否定こそ矛盾理の肯定……………三二

    1 理想主義を越えた理想……………三二

    2 教育學は奴隸學である……………三四

    3 人格の湖……………三六



- 4 意識あるものゝ意識なき美……………二九
- 5 無意義な偶然……………三三
- 6 兒童のカクシの中で歌をうたふ……………三六

### 六、科 學 の 奥……………四一

- 1 もちかけなき道を歩む……………四二
- 2 「なぜ」といふ目へ温衣を着せろ……………四三
- 3 數が物言ふ時代……………四四
- 4 運命にだつて意志がある……………四五
- 5 平凡なところから兒童がぶつかつて来る……………四六
- 6 孤獨の交錯こそ社會性……………四七

### 七、歴史にのらぬ人々……………四八

### 八、教育と過程……………四九

- 1 永遠なる現在……………八九
- 歴史——現在——未知……………
- 2 意 味……………九一
- 存在理由——……………
- 3 乗鞍山上の朝化粧……………九五
- 理想 化——……………
- 4 教育者の臍……………九九
- 5 平凡な對象……………一〇〇

### 九、特殊な角度の群……………一〇二

— 教へ子からの手紙 —

### 一〇、意識を失つた私の手紙……………一〇三

- 1 可愛い物品……………一〇三



2	善の出納簿.....	一四
3	速度からの感情.....	一五
4	それからは自由です.....	一六
5	目かくしで働くのです.....	一七
6	馬鹿になるのは.....	一八
7	歴史を算盤ではなく.....	一九
8	歴史の蓄.....	二〇
一一、陽の下での二つの立場.....		
二二、技 術 學.....		
1	技術者の感覚.....	二四
2	教育も消費である.....	二五
3	型からの亂射と個性.....	二六
4	綴方機能は表現である.....	二七

5	白壁と壁虎.....	二六
6	街の目玉.....	二七
7	教育の風景畫.....	二八
A、知識—個性—綴方—教師の態度—表現—象徴—一角の圓—奴隸學は哲學— 自己の學—もだこと—愛は制約努力—次の幸福		
B、現象學的教育への叛逆的禮讚		
事實と本質—偶然と必然—有限と無限—象徴的技巧—職人の話		
C、音樂の有る教育風景畫		

人	間.....	二〇〇
---	--------	-----



一、主(客)観と客(主)観

(一) 冬の濱邊に只ひとり、  
砂をいちつてゐましたら  
しんだ名も無い貝殻に  
生きた小虫が雨宿り。

(二) ふいに、あとから先生と  
すがる子供が小虫なら、  
涙の私はなんでせう  
空にはまたたく星一つ。



彼はかうしたものを作つて若さのやり場に困つてゐたらしい。今は渾沌の世界から歸つてイヌの挑戦からも逃れて來た。

あまりにも主観的な生活態度の陣營から脱出して今はその奥に客観をつかんでゐる。主観を固守するとき常に主観であることは主観でさへもなくなつて、意識は疲れて幻影の彼岸に流れ客観の太刀先に觸れても一滴の血も出ない。そして概念的に徒らな運命への反抗意識が昂奮するばかりだ。

太陽であればよい教育者は、路次の汚物の中へだつて浸み込むのだ、光が主観で、汚物が客観だとすると、そこにはもう主観でもない、客観のみでもない生活として、ぎこちな意識の緊張は失せて、もう濇い意識が育つものである。

盗みする子供、喧嘩する子供、ちつとも勉強しない子供、中庭の枇杷はなくなる。六十人の圖書成績が三十五枚よりテーブルの上にない。教師はそれ等のものを下駄屋の看板になつて路上に見てゐなければならぬ。

——先生クレオンが無くなりました。

——Hだ、Hに違ひない。

彼が犯罪者を出さうと意識して調査を始めたことを知つてゐる児童の中からは容易に盗人が明らかになるものではない。調査者が主観で犯罪者が純客観であるかの如き行動には光は輝かぬのである。

彼は六十人の児童と共に砂濱に出て盗難の事件を忘れて遊んだ、児童も勿論忘れて貝を拾つた。

卒業式の前日であつた。

——先生クレオンは私がとりました。

泣きくづれる児童は彼自身であつた。

現實の醜惡と誤謬と矛盾とを與件としてこそ眞理は美化するのだといふ信仰が生れた。

彼が自己以外に犯罪者を意識して調査を始めたとき何等の手がかりもなかつた、客観(犯罪者)の奥に主観を認めたとき事件は解決した。

道徳は押し賣りではなく、高きところから教示する言葉でもなく同一地上に下り立つた路上の螺旋であつた。

彼にとつての教育原理、人生過程は、洗濯の逃走である。



## 二、洗濯の逃走

箱の青空は間借りの裏屋である。南と北が障子で、隣の板塀と井戸圍とで仕切つてのいびつな四角である。三坪の庭に續いて境なしの流しがある。家主のもみぢが彼等の物干し場をちぢめて、ちめつかしてゐる。

手の泡が鉤を盥から拾ひ上げると。

——ボタンは小<sup>こ</sup>そても沈むんか？ どうだん。

しやがんだ母は横槍の三つ子に捕へられて洗濯と遊ぶのであつた。

——木は大きても浮くにどうだん。

科學の母は無意識の問ひに追ひ立てられて、手先で答を探すのであつた。子供にはそれは鬭争の何物でもなかつた。指物屋からポケットが持つて來た木のおもちや、三角、四角、半月、變な多角形を盥の中へぶち込んで子供は自分に答へるのであつた。

——わかつた、母あちゃん、盥は小さいで浮かんだな、海ならきつと浮くぞ。木の浮くことは子供に問題でなかつたらしい。

——海だつて浮くもんですか。

——木の船、木のアヒル、こら汽車だ、

——ポツポツボウ、ズウズウ、ズウ

——おや、今日は汽車まで水浴びかね。

母にはまだボタンの沈むことが頭にひつかゝつてゐる。

——うん。アヒルと汽車のショウトツだ。

——あツ、母あちゃん、ボタンなンボタンはボタンだで、小そても沈むんだな。

——海なら浮くかも知れんよ。

母はすつかり逆モーションで自分の氣分に同意してしまつた。日本の盥からブラジルの海へ夫を母子で荷つて行きたかつた。

母は玩具の盥へ寄りそつて話すのである。

——榮ちゃん、これブラジル行きの船だよ。もうこの船は今頃コロンボまで行つてゐます。



母は自分に話し、榮夫は母の話を盥の中のおもちやで聞いてゐた。

移民船内の朝だ。

黒い通學靴で身を斜に切つて歩く、帽子は半分空をのぞいてゐる。五、六人の少年が板の地球を踏んで三等前室の階段を下りかけてゐる。

——靴なんかくけてどこへ行くんだ。

白い齒が問ひかける。茶ツ葉服の黒人火夫だ。眞黒な手を舉げて涼しい風に鼻を吹かせてゐる。機關室ではドンドンと話の調子を拾つてゐる。

——學校へ行くんだ。

——父ちゃんは此の船にのつとるんか。

——さうよ。こりや、ブラジル行きだ、それ、こゝに榮ちゃんも母あちゃんも、乗つてゐるんでせう。

——ふん、これが父ちゃんだな。父ちゃん。と呼んでみる。

——父ちゃんは船の中の小學校の先生なんです。

母はもう洗濯から逃走してゐる。洗濯をしてゐるのは父だ、髪の長い父だ。母は朝から大阪中の職業紹介所を飛び廻つてゐるのだつた。母は手に泡こそ着いてゐるが、箱のやうな空をみながら洗濯はしてゐない。無理にも洗濯をしようとなら、砂ぼこりの街路を走りながら自動車や電車を苦にして洗濯してゐるのだ。

——そら父ちゃんが黒板に字を書いてゐるよ。

——さあ皆さんの一番すきな外國語フレンジョを始めるんです。

——アー、ペー、セー、デー、

——Hの次がむづかしかつたんですね。昨日は。語學は常識以下の人にだつて樂なものです。それにあなた方は聰明な上に國語をならふつもりなんですからね。今此の海が誰の掌中にあるかを知つてゐますか。

いろは？ エー、ビー？ アー、ペー？何處の國の海ですか。

——イ、シヨツタ、カ、エリ、



——エミ、エニ、オ、ベ、ケ、 だろ。

黒板に向つて難儀してゐる先生はそつちのけで、

——オツベケベのブツブツだね。

五十を越した子供が隣の十五六の組長に聞いてゐる。

——分からないところは、各組でどん／＼調べて進んで下さい。教室だつて三十哩で走つてゐますよ。

船中の小學校は始つてから三日目。

五番中甲板の食堂が教室にあてられてゐる。

校長、愛知縣知多郡野間村出身、十年程小學校に勤務の履歴ある人、金山丈太郎。

教員、海興移民中の有識者、木村貫次郎、同重夫、吉山貞造、八木末吉、中島清一郎、平野末

夫、長島榮三郎夫人、木村重夫夫人等。

此等教員は皆貫次郎の教へ子である。

榮夫はお椀にもつた一杯の水を移民船の頭から何ばいとなく、あぶせかけた。船は、びしよぬ

れで、うろ／＼盥の中で散歩してゐる。

——父ちゃんぬれるよ。

——ひどいスコールだね、と、

洗濯の父は答へた。

——おや父ちゃんが洗濯してゐるの？、

榮夫は玩具を捨て、立ち上つた。

——母あちゃん、何んぞ。

今にも、ひろげた指をかみさうに要求してゐる。

——母さんはお留守ですよ。さ、も少し。洗濯の終る頃には母あちゃんがお土産もつて歸つてくるよ。

——母あちゃんどこ行つた。

榮夫は、中腰の母の肩に寄り添つて叩いてゐる。

——街の真中で洗濯よ。

——では、父ちゃんは？



——ここに居るじゃないの。もう少しおもちやしやう。  
——もう僕、手が遊ばない。

他人であらう程のみじめな父がふらふら歸つて來た。脱兎のやうに駈けつけて横取りした榮夫の手には空の辨當箱があつた。  
もみぢは洗濯物に日覆ひされて初夏の日をくすんで暮れた。

### 三、「共」とは一つのことだ

生きてゐるものに生活者でないものはない。とは大まかな肯定ではあるが、意味ある基調である。生きることは最も具體的であつて

意識されない意識である。

意識を意識しやうとすることは解剖の極致である。その解剖のために生れた分析による對立は意識者に知的歡喜を與へる生きものの本尊の影ではあるが、そして亦生活者への必要な材料ではあるが「生」そのものではない。生とはその對立の背後にある分析以前の——意識しない意識である。最も生きてゐるものは意識しない意識である。

これが説明でなくて象徴であつたら、もう立派な藝術品であるが尙しかし此の裏にこそ本質的な教育原理を暗示してゐるであらう。

正しい生活の燃焼が溢れ出る人程、より教育家であるとも見られる。従つて或場合、一文菓子



屋のお婆さん、土くれに身を任せてゐる百姓等、自ら教育家であることを知らずにゐる人々がより教育者であるとも見える。

だが「正しい」とは「眞善美」として三者を對立の形に置かれたその一つなる眞を指してゐるのではない、その對立以前のもの分析以前、言華以前のそれなのである。

——そんな教育家があるものかと、或は當の教壇上の人々から御叱りを受けるやう。

——あゝ、そりや、あなた方程立派なより、教育家はないさ。それでこそ私の言ふ一文菓子屋の婆さんとか、ぼろにくるまつた百姓は非合理的にも教育意識を忘れた——あなたの生活態度であればよいといふのです。

教壇上の教育意識をもつたものゝみが最高の教育者であると思つてゐてはなるまい。

いやに教育意識をもち過ぎると、教育は生活か、準備か、などと概念への分析が始まるのだ。

教育は「即生活」か「準備」か、その何れでもあり、何れでもない。非合理的合理にも、その兩方とは二つの妥協ではなく、教育一なる兩相の影二つで、その一つを肯定することは他をも肯定して己れも具體となるのだ。二者の一致綜合とは「一」の知的解剖が二つであつて、その二が後もどりすると元の一になるといふ<sup>プラス</sup>の形ではない。解剖の最初、一が二になるとき、解剖もれ

の $x$ が存在してゐる。即ち $5 \parallel 3 + 2 + x$ である。従つて綜合とは $3 + 2 \parallel 5$ では勿論ない。 $3 + 2 + x \parallel 5$ ですらない。 $x$ が $x$ である以上 $3 + 2 + x$ といふ力は人間には與へられてゐない。3のみでも抽象であり、いや一段低い具體であり、2のみでも然り。只5の實相を知らんがために、5のある影として3乃至2なる姿を幻想して、分析したものをプラスすることなく分析直後に超時間的な分析以前への復歸がなくてはならぬ。

教育が生活であることは、教育が準備であることなのだ。教育即生活論と教育準備論が平行するとしても、その平行線の無限上の交叉する頂點こそ教育の本質であり、つまりは言葉以前の或る物なのだ。

見よ、各自の手近な一時間の授業を、それが純教育生活論者の具體か、それとも純教育準備論者の具體か。理論上の何れかであることは兩方「共」であることなのだ。「共」とは一つの事だ。



#### 四、不思議な機縁での觸發

児童と教師との間で數多い交渉は第一言葉である。言葉は生きてゐることだ。單なる言葉では児童は形作られてはゆかぬことを自身の體驗が肯定する。もし教權とでも言ふものがあるとするならば、それは「細心なる自己管理」なのです。その自己管理も自分の全體へ目がとどかぬのですけれども、教師自身の生活を指導する内的な無意識の理想方向が、最もいつくりと児童に觸れて行くのです。(この理想云々といふことが後になつて一見「太陽を包んだ影」といふやうなものになるのですが)その意味で教育とは「不思議な機縁での觸發」とも思はれます。

言葉を越えた——その言葉の出づる心の内流たる、それこそ一步も誤魔化せぬ教師自身の信仰を、児童の本能は、うれしくも恐ろしくも豫知するのです。教師も児童も知らずにはゐるのに、その豫知は、児童の形の上に教育の効果であるかの如き外的の反映をするから、教師にとつては、意外なことを見せつけられる氣がします。

教師なるが故の眞心ではあるが、懲罰、諫言、教訓、……一時の興奮は児童にとつては、他の

喜劇か夕立雨位にしか表向はひびいてゐないのです。

「こんなことは教へた筈ではなかつた」と思ふやうな児童の活動は、その實教師自身も知らずにはゐる(であらう)。嘗ての教訓、諫言、懲罰の裏にある或る物を、それをむしろ、外的にお面んと來た教訓より以上の本物であることとなるよう児童も識らずにつかんでゐることがあるのである。そこで言葉を單なる言葉でないとすると一つの言葉が、兩者お互を識らない方へ伸展させてゐるものである。

言葉こそ生きた力である。

最も、そんな皮肉な見方をしないで、個性を認め、生くることは唯一つの存在であることを許す今日では「同一の刺戟が」それ／＼に「特殊な有難さ(力とでも見る)」として効果づけてゐるものである。

教師の立てた計畫(表てから見た)乃至理想からは豫想外の方へ伸展變化してゐるものです。

あまりに明らかに公表し意識する目的観や方法論は、教師自身のために児童を利用することになる興奮になり終り易く、それは亦却つて児童に利用される弱點ともなる可能性を多分に含んでゐることが多いのです。



それにしても人間の計畫の長つづきしないこと。朝と夕とでは、もうすでに人の氣もちに差異がある。朝に立てた理想は夕には魂の瞑想でしかなくなつても悔いがないのが人間の普通のようにです。

しかしそんなに捨てばち的な見方ばかりも出来ない。夕に投げ出したことも、それは皮相な主観的不可能でしかなかつたこともあるのですから。即ち自ら障害物を作り出して前路を妨げてゐることにもなつてゐるのです。自らの内に湧いてくる障害物を客観化して不可能な他人ごと故だとして、とんだ足ぶみや退却をしてゐる。そのために出来る教育もまで回避してゐることになる。教育は全能でないが不可能でもないのです。

かりに客観的存在を許すも、聖者にとつてはすべてが神聖で、詩人にとつてはすべてが美であり、下賤なものにはすべてが醜悪であるかも知れない。吾々の見るすべては諸事物にひそむ吾々の醜である。客観への裁きこそ、自身<sup>○</sup>の魂<sup>○</sup>の告白<sup>○</sup>の反映<sup>○</sup>で、すべての賞罰は吾々自身への賜物であるべきである。その故に同一の兒童が善人にも悪人にも見えるのである。吾々自身の變化が一切万象を變化させる一原理である。

そこで私は教育が案外なところへ伸展するものであることの上について吾々の意識する活動

は、むしろ魂の全活動の一部に過ぎぬことを肯定せねばならなくなる。

論は多少飛ぶ形になるが道德などといふこともこの「意識する云々」が魂全活動の一部でしかない原理に基礎づけられてゐるとせねばならない。

教育を道德と見るにも根拠はある。しかし道德は意識に基することから、教育しようとする程、兒童は彼たちを離れて行く痛ましい體驗がつづくのである。そこに教師なるが故の生活は教育主義を生むのである。創造教育、自由教育、自學自習……等教師は右往左往思想の重荷に目迷ひをしながら、それからそれへと思想の王國を遍歴したものだ。その印象乃至獲物は混亂、苦痛、不安、疲勞等そのものであつた。

彼はここで新教育主義の外形的な行き詰りを考へて見る。

それにしても此の流行を有難く感謝せねばならないのは新カント派の學徒の活動である。教育活動の本質を學理的に基礎づけてくれた點は教育史上に輝いてゐる。彼の學徒に依れば哲學の根本課題は意識の綜合統一といふことである。

そこで教育を「被教育者の意識の成熟」と見る限りに於ては教育は哲學によつて始めて全體としての最後の基礎を與へられるものとせねばならない。認識論と倫理學、美學——それ等即ち全



體としての哲學體系によつて人間教育（眞理への教育、道德への教育、美への教育）を基礎づけやうとした。

けれども此の新カント學徒の唱ふる哲學によつて今日の多くの新教育が生れたとするならば、一應は色々とカントの哲學を調べて見なければならぬ。

カントは道德を以て人生最後の眞實在と認めてゐる。

然るに道德は道德の彼岸なる「一」によつて基礎づけられなくてはならぬらしい。有限が無限によつて基礎を與へられると同理である。ところで「理性の批判といふ立場に終始する哲學」にあつては道德の彼岸なる「一」は認識不可能ではあるまいか、かくて教育を道德教育と見るも、道德の彼岸なる「一」は認識論の不到達點である限り、此の派の哲學によつて基礎づけられた教育は却つて外形的に行き詰ることが當然ではあるまいか。

然るに彼はいつも流行を追ふて早く結論や結果を求めたがりの、人生をあせるものであつた。皮相なことに氣をくさらせ過ぎてゐた。

そして遂には運命にまで不平をもつて、尙自己を肯定——もちこたへようとするのである。彼はすべてを攝理より聰明なものと思つたが、どの失敗も、實際は自分に起つてこなければな

らないことかどうかを疑つて罪を教育主義そのものに歸せようとするのである。これも教師にとつては一つの痛ましい生活内容であつた。

教育主義そのものの罪であるべき對象のうちに淺はかな自己をみつけ出して渾沌とした世界から歸るのが教師の自覺である。イズムの挑戦から復歸して主觀に據らうとするとき再びその瞬間から血みどろの體驗を味はねばならぬ。

世の醜惡を客觀的見方するときのみ一時の安易を感じるも、主觀生活を懼れ始めるとき、それを實現せんとする計畫の前に萎縮してしまふ。

生命の渾沌の相は悉く生命を否定するのであるけれども、人生はのがれられぬものである限り、心のあせりは肯定を生むのである。行爲は運命へ復讐を心がける。それは若人の勇氣である。

生の肯定は主觀にかたより勝ちで善を認むるも外部的な尊さが濃い。主觀の力は人生の美を決定することも出來ず、有形以上の善も認識し兼ねてゐる。

そこに現れる一種のかしこさは世を離れた己れを清くする山の生活で、人類の或る場面として許れる憧れではあるがそれは尙小乗である。

所謂主觀でもなく客觀でもない、主客未分の對立以前の意識による生活、そこにはエゴイズム



の批判を越えた美しい自己讃美も生れて、生活は主観でよいといふことになる。それは主観を生かす背後の「一」への復歸をいふてゐるのだから。

## 五、全否定こそ矛盾理の肯定

### 1 理想主義を越えた理想

言葉が生活に先行してゐることも誤解をまねく。

教育しよう顔や、教育をうけた顔は意外にも教師も児童も冷い文化人で土像の移動に成り切つてゐる。

道徳は生活することであり。高きところから見下す原理でもなく、生活のみはりでもない。みにくい現實の生活に味方となりさへすれば、

「教育せざる教育」といふ形にまで清められて行くのです。教育しようとすれば、児童は我から離れて行く、教育の理想は刻々に教師自らを裏切つて行く、教育しようとするものは、その意識を外部に出不さいで只自己に沈潜するの外八方ふさがりである。

自己の魂そのものを直観せねばならなくなる。それにしても凡そ人間は美しく見たてた自己に



妥協することを自己に許してゐる。通常の意識による自己とは多く淺はかな我ならぬ我を擱んでゐるに過ぎない。生物學的な交友的な一種の常識を一寸離れたあたりの理論づけの自己にあざむかれてゐる。

そこで尙一步を進めるものは、精神的存在を尊くも絶對的實在と見る。成程そこには百歩もの進展を一應はみとめる。しかしそこに生れる生活態度は理想主義的な哲學觀に基礎づけられて盛んに肉體は精神に征服され、本能は理性化へと急がれる。ために整理された平和な理想境は外部的にのみは建設される。

現實を見るに理性に追はれた妥協は一面の肯定と一面の否定とを生む。ここには宗教を否定した形の生活態度を高調することになり

道德は再び高嶺から見下す原理となつて生活を離れ、

善は有形のものとなつて無形の深遠を逃れ、

美は主觀のみからの肯定となり、

所謂主客同一の境地ではなくなる。

亦しても見つかる内的生活の醜さ。

兒童のためにすべてを與へるべく教育生活は出發されたのに、その實すべてを奪ふことになつてゐはしまひか。かくて教師は——教師としての資格なきことを自覺す。

それでよいのだ。

自分を境遇に任せようとする。希望とさへも離れた方が本物の人間になれるかも知れぬ。それでよいのに、それなのに教育的無資格者なる自己懺悔によつて「救はれたであらう自己」に亦すがりつくのだ、自覺者といふ自慰的な自己の力に尙も我慾を追求するのである。

雨にぬれ雪をかむり黙々として耐へてゐる一片の草の葉にも物語りかける資格はない程の自己をみるのだ。

かくても自己肯定の理想主義者は、いざとなると、人格といふ「かくれ家」をもつてゐる。醜き自己の、みつかる毎に、そつと自意識を、人格といふ美しい概念にかくして始末してしまふのである。しかし概念は體驗によつて生命づけられるものであることをぬきにしてなら、どんなことでも解決されて行くのだ。人格なる概念に一度自己體驗の洗禮を受けさせてみるがよい、さう樂々と人格なる言葉さへ外部へ出せるものではない。



人格内容の重要な「愛」についてすら、それはかなしくも相対なものである。「憎みなき愛」を一瞬でも肯定することは出来ないらしい。「人が眞に愛することの出来る時には自分へは何物も要求してゐない」。

愚なもの、醜きものに對するお互の態度こそ自己の愛の深さを知る尺度ではあるまいか、

これこそ純なる愛だとくみ上げてみても、己れの愛なる内海へ一杯の水としてあげた位のささやかなもので、も一度純愛をくみ上げようとしても、もうそれは海水との見分けを失つた淡水である。兒童の意識面に引いた純愛の一線もかの水面に杖もて盡ける一線の如く印象は消ゆるであらう。

人は既に自分の衷に萌したのみを會得伸展するとしても、身、教育を生活せんとするものにとつてはあまりに力なきに無限の中へ自己を放擲せねばならなくなつてくる。

## 2 教育學は奴隸學である

その日もむつまじく遊んでゐました。

葉の天地初夏の木蔭だ。

猿と兎と龜と三疋の仲よしもの。

折から通りかゝつた旅人は彼等の前でバツタリ倒れた。そして旅人は言ふ。不幸なものを救ふは健康者の權利だ、長い間の飢はお前等の前で俺を倒したのだ、と。

三つの生者は、それ〴〵の力の限り食物を探すことにしました。

猿は枇杷の木にかけ登つた、それは自分の力を必要としない程樂に。黒々とした葉蔭からつづらな見るからに誘惑的なしつとりとした橙黄色の實が頭を出したり、すつこめたりしてゐます。

猿は一番うまさうなのに目をつけて手を出しました。

——いや待て、心の中で手を止めて、そして、あれ、あれ、あのうまいのは葉蔭になつてゐることに安堵して、どこから見ても見える實のうちから、うまさうなのを、もぎ取つて下りて來ました。

それでも猿は兩ポケットの枇杷に己の唾をのみ込みながら、何とかして自分の食慾だけはおさへつけて旅人の前まで來ました。

旅人が無理にも、ひつたくらうとする枇杷の實を猿はしつかとポケットの上から抑へて、そこらを見廻しました。



——あたりに私の連はゐないのかしらん。口の中でつぶやきながら向ふの椎の木の葉蔭からこちらを見てゐる猿のあることを知つたこの猿はポケットの裏返へしまでして残らず旅人に與へました。尙も要求する旅人に、

——そら御覽、もう、あの木にはうまさうなのはなつてゐないでせう。今にいちごでも取つて來て上げますからと、旅人をなだめてゐる。

——何といふ遅のだらう、兎と龜は。

後からの兵糧を旅人は不平の中に待つてゐるのです。

——東京郊外廣場の糧食分配所へ行つたつてこんな遅くはない。「おれは一切のことを飽きてしまつたのだ。だが、まだ死にたくないのだ」と、側からは思へるであらうことを、おれは、おれが知らずにやつてゐる。

のそ／＼やつて來た龜のポケットからはピチ／＼の魚が跳ね出した。旅人は所有主を明らかにするが如き態度で飢を満す足しにしてしまつた。

——兎が龜に負けるのはお伽噺だけではないのだ。と旅人は何時の間にやら集つて來た、猿と龜の仲間の前で兎を半笑ひに怒つてゐるのであつた。

大勢の猿と龜は手を拍つて兎を罵るのです。

兎にとつては旅人は十字架であつた。

兎はありもしない枯草と枯枝を旅人の前に積むのであつた。兎にとつては一生一代最後の見事な建築物の竣功を急いでゐることなだつた。馬の歩み方一つ分からぬ奴等に、新しい魚と、誘惑的な枇杷の實と、うづ高い建物のやうな枯草とでどれがあゝの石のやうな旅人を一番救ふであらうかが分るものか。

何ぜかなら彼の旅人の疲は肉體的なものではないのだ、彼のポケットには數百金の金が死んでゐるから。しかし

教育學は奴隸學であることだけは言へる。

兒童自身が旅人のやうに倒れて、そこに何人もゐなければ、自ら匍ひ出して草でも食ひかけるであらう程にすさんでゐるものを教育しようとする教師は少くも猿になり龜にならねばならぬ。山をかけ野をかけ、草をかきわけて血みどろ汗みどろの兎は誠にとんまでありました。

——おれには手もない、足もない。智慧もない、きつと同情の意識もない。唯動いてゐるのだ。兎は言つた。



——枯草なんか食べられるもんか。

炎々と燃えしきる焰の中へ、やをら飛び込んだ兎は、あの豊かな自らの肉を焼いて旅人に捧げた。巧な木のぼり術が、眞の教育を解決したか、うまい水泳術が人間を育てたか、自ら肉を焼いた兎にも親もあつたであらう、妻子もあつたかも知れない。

世の思想家よ、學者よ、教育家よ、自らの教育説を組織するに技巧とか、腕とか、牙とかを捨てやうではないか、捨てやうとする意識すら、意識しないやうに。

論は後へもどる。

自覺を基礎とする理想境への憧れも、自己人格の分裂も體驗上に於ては同一の兩相であらう。兒童と教師との人格の結ばれは、その瞬間から分離を豫測してゐる。

清く澄む人格の世界はその實、亂々たる内流の象徴である。

### 3 人格の湖

極めて立派な人格者によつて村は整ひ教育は進んだ。平和な風は畠の麥さへもよろこぶ若々し

さであつた。枯れ疲れた骨のやうな功勞者のために湖は出來上つた（その實山田の灌漑貯水池である）。舟は用意されて人格者は一日を楽しまんとした。水底まで透けて見ゆるきれいな水、ふとさしのべた手にくんだ湖水の水。まあなんといふ濁りであらう。

すかして見ると清く、自らの手に觸れるとき汚濁そのものである。試みに足を觸れやうとして舟から片足下して見た、どうであらう水面一尺下はまるで火の渦である。見る／＼吸はれるやうに引き込まれ行く彼は、果てしの知れぬ内部へ内部へと落ち込んで行くのであつた。

——おや！ こりや淡水湖ではないのか。村人、部下、兒童の涙の集りであつたのか。

お互表面静けき人格の内流は、そのまゝ自らのものとして外形に流れ出でることではなく、多くは對者の涙となつて出るものである。

人格の清さと内流の動亂とを二つに割つてみると、人格者は尊く、涙の他人は汚れてゐる。

### 4 意識あるものゝ意識なき美

——自然よりも美しい——

再び言ふ。



彼の組でクレオンが失へた、調べても出なかつた。彼は彼の力なさと兒童の汚れに怒つて砂濱に出た。

兒童が悪人でもなければ彼が無力でもなかつた。

黙々と笑ふ前には自然は美しかつた。「自然は自己をさへ欺かない」ましてや、小さい人間をいも、どうしやうとするものか。

自然は親切だ——そして人間へ親切にしようとする意識をもつてゐないからこそより美しい。温である。澄んでゐる。友達たらうとしない小鳥と時を過すことも出来るし、意識人が踏みにぢる木蔭さへも十年間の讀書に勝る。生垣の花、太陽の光、彼はもう自身が胡蝶である。果てしれぬ山に上る蟻であるにしろ

意識ある人間が意識をすてるとき 最初から

意識のない自然の美より、どんなにか美しく

輝くであらう。

一切の幸福は捨てるとも自然の恵みには抱かれない。どうかすると弱いまゝでの教育者生活、一

沈み勝ちの生活には一陣の風、一片の浮雲、若芽の緑から生々とした暗示が欲しい。社會性を帯べば帯ぶ程、自然との交渉をより尊く憧れるゆとりがほし。

空に歸つた。

目のとどかぬところを荷馬がきしる。自動車がどなる。子供、雞、雀それは耳ざはりでも、いらだたしさでもない、全體の光景の静けさを助けるのみだ。

自然は實に忘れつほい。

彼のしたことに對して一口も言はない、意識しやうとすらしない、自然の中へなら一生、生き埋めにされてもよい。生きとし生けるものゝ室は自然の懷である。

反抗しない自然にすら親しめない生活だつたらどうする。愛と犠牲とをふみ臺にして我慾は盛り名を追求する人は、お互我が體驗を味ひ行く限りに於ては教育は信仰の問題を基調とせねばならぬ。

赤裸々な人生問題は、生きる一個の淋しい教育者のそれであつた。奥底から自己にあきれば、生命の破滅を告向せねばなるまい。かくれ家なる人格の内流に飛び込む事によつてのみ教育の第



一步は始る。

教育は最後まで教師論である。

生命の大海原なる底深く潜り込むとき却つて困り果てたる自己は空しくなる。特殊なるエゴイズムは爐中に落ちたる水滴のやうに知らず蒸發してしまふ。

教育と宗教とは外形には別々でも生命の問題としては一つである。

客觀的見方を否定し、主觀的醜惡を否定して全否定の立場に彼は行き詰つて人生の決定一つだにない。あるとするならば「死」あるのみ、尙死の變形とも見る苦痛である。

苦しめる生命の合掌、それは宗教をこそ生命とする。

聖なる世界——意識なきものゝ美ではなく、

意識あるものゝ意識なき美である。そこに一切を否定し行くことは意識以前の肯定として「斷じ得ざる斷定」が生れるのである。それは「一切を否定した我れならぬ我（他）の我への肯定である」。

人生に於ては何物をも終局としての頼みとはならぬ。空こそ存在である。故に彼はリアリズムの素朴論より、ニヒリズムの現實觀をこそ過程的な終局とみる。

うち立てた教育理想の根本より碎け行く姿こそ、痛ましくも向上なのである。

## 5 無意義な愚然

教育者生活上、教師と兒童との間に於て幸福を求めようとした、ところが一切を否定されてしまった。

幸福を基調とする限りに於ては人生は永遠に解決せられるものではない。幸福を最上級とする見地からは人生の決論を生まない。吾々は皆幸福を望んだ。けれどもそこにはしばしば案外が突發する。生命が

或る簡単な事實と

組合つたがために、如何なる努力も、そこから切り放ち得ぬものとなることが多い。

無意義な偶然と

言つたやうなものが尊くなつて來はしまいか。

境遇と性格の連鎖が我自ら憂愁を育てあげてゐることになり終らせてしまふ。

神の攝理に反抗するものは先づ吾々が粉碎されてしまふ。神が嚴格であると思ひ、運命に幾分



も内心的に不服をもつたり、神の完全性に疑ひをもつたり」する間は救ひの腕は伸びて来ない。  
神をすらい意識せぬことだ。

懺悔から自慰のなくなつたとき、哀傷から救はれて人生は明るくなる。懺悔は多く自慰になり  
終るから神は此の世から試練を無にしない。

彼はこゝに

シルベスターの詩をかりるであらう。(柳宗悦著「信と美」中より)

父(神)

神のみぞ最初にして最後、

エロイ、吾神、聖なる一よ。

その力こそは全能、

その智慧こそは全智

その存在こそは、一切の至上なる福祉、

その御業こそは完全の充實。

萬有の許にあつて、許に埋もれず、

萬有の上にあつて、上に置かれず。

萬有の内にあつて而もそこに包まれず、

萬有の外にあつて、而もそこより除かれず。

一切を越えて、萬物を統御し、

一切に降つて、常に萬物を支持し、

一切の外にあつて、凡ての一切を含有す、

一切の内にあつて、全部を充足す。

一切の内にあれど、何處にも含まるゝ事なく、

一切の外にあれど、より多くを占むるもの何處にもなし。

下にあつて、而も上に越ゆるもの一つだになく、



上にあつて、而も下に支ゆるもの一つだになし。

動かすして御身は世界を遍歴す、

而もその内にも外にも置かるゝ事なし。

不變にして時間なく、而もよく時間を變じ、

常に安定にして、而もよく常なきものを整ふ。

外なる威力も内なる命數も、

御身が嚴かなる本質を變ゆる能はず。

今日と明日と昨日と、

御身に於ては一つにして、常に一瞬なり、

そは永へに分たる事なく、又決して終ることなし。

今日が御身に於ては永劫に持續す。

父よ、御身は此偉大なる天體を造りし。

無より御身は一切を創りなし、

御身の心の觀念をもて、

凡ての種に形態をぞ與へにき。

御身は嘗ていました、今もいました、又永へにいます。

かくて御身が選びし者を決して棄つる事なし。

神の試練こそ運命であり、機會であり、偶然の尊さであり、或る眞理としての矛盾から呼ぶ義務の聲であつて、そは意識として反抗し難い不安を人生の負擔とせずにはゐないのです。神は人間のポケットの中にながら尙外からヴェールで抱んでゐてくれるのです。

時空を越えた生活といふも、時はこつそり抜け足で各自の心身から絶えず抜け出してゐるので、一切のものは動亂し、一切のものは不可知で、暗黒で、形のない變で——世界はお伽噺で宇宙はミイラであらうとも、神にすがることのみは自由な眞理であらう。



神とは意識以前の機會であり、偶然である。實在は行動であり、意識は動である。

時の小川は意識の中を流れて老は身にせまる。しかし落膽は一種の無信仰だ、青春は英雄的だけれども、老年の宗教的なるのも、若さの一つである。

## 6 兒童のカクシの中で歌を歌ふ

あまりに人生を暗く見過ぎたくもない。自己批判といふ一面のみでは人生は腐蝕して行くばかりである。

知らんとする渴望が自己に向けられたとき、

その渴望の對象は飛び去つてゐる。

意識の最も生きてゐるときは、意識を意識しない時である。極點まで加へられた解剖はつひに自己を食ひ盡すことがある。その意味で軽い反面から見ると、常識的な生活は明るい一つの統一である。只常識的なるは前面に大深淵のあることを知らずにおるだけ自己が淺いのであるが。

内部へ向つての不斷の注意は遂に虚となる。又外部へ放散する生活は常に健康で一つの生活法である。

さきに彼は、教育上の愛を屠つてしまつた、しかし全否定の底から生れた愛は明るい。それは、生存の力だ、信ずる力だ、平和の力だ。

愛こそは普く行き渡つてゐる調和の表象であらう。

愛は信仰だ、信仰は力だ、光だ、幸福だ、信仰によつて人生を決論するとき、幸福も湧く、今迄否定して來た理想の實現もある。

みにくい我を抱くことも、離れて行く兒童を追つかけることも、計畫として許され、理想も輝くやうになる。かくれ家であつた人格も永遠者の具體化せんとする姿の象徴乃至影として實在性を帯んでくる。

土砂降りの雨、俄雨は氣紛れ者だ、止めば日光こそ洪水のように流れる、かんしやくもちの空は涙と笑、嵐となぎ、交々に見せてくれる。草木も人も嵐なしには春らしい伸びる力は注ぎ込まれない。

人生は、矛盾を肯定することだ。



彼はあらゆる教育者と、手をつないであの歌をうたふのだ。  
連れがなければ孤獨とでも手をつないで、みんなで歌ふ。  
児童を袂へ入れて、ポケットへも、懐へも、腹の中へも、それよりも  
小さな児童のかくしの中へ自分を入れてもらつて歌ふのだ。

## 六、科學の奥

### 1 もちかけなき道を歩む

彼は今の文化人をもつて満足してはゐない。ことに文化人は科學人のみだといふひびきのある文化人では承知出来ない。

世の人の知る科學が所謂科學であつて彼の信ずる科學を否定する科學的文化人であつたら、かくの如き文化人を養成することを以つて彼の教育とはしないのである。

彼の信ずる科學は飛行機の發明やラヂオの文明ではないのだ、飛行機の發明とラヂオの文明を以つて自然に對する誇りとするやうな、自然への挑戦的な勝利の傲慢を科學とはしない。科學が人類を底知れぬ傲慢へ導くものならば、科學は人類への大きな敵である。さうした科學を聯想する文化人を養成することを以つて教育の理想とはしたくない。道德が高いところから生活を見下す權威でないと等しく、科學が自然への誇りではなく、むしろ感謝であらねばならぬ。發明は自



然への人類の降服である。こゝに冷い文化人と温い文化人への岐路がある。

科學が論理整然たる發明といふ數量で終るのでなく、自然征服といふ傲慢を以つて終結せず、その發見發明といふ幸福への感謝となり、未知なる神秘への積極的合掌の憧憬といふ形で宗教までの與伴を理解することが人間生活に存在理由を有する科學である。

彼は科學を無條件に嫌ふのではない。尊敬するが故に科學への別な意味を湧き出させようとするのだ。

文化價値を眞善美とするとき、その何れにも聖なる沈黙の流れがなくてはならぬ。眞理の眞理は聖であり、美の美は聖であり、善の善は聖である。

素裸で投げ出された人間は、先づ自然を見て驚異したのだ。そこに素朴であらうとも宗教も藝術も哲學も生れたのだ。自然は親切をもちかけて來ない。こびても來なければ、道の押し賣りにも來ない。意識的なもちかけがない。

美だ、輝だ、頭が下る。

赤兒の美、赤兒の無邪氣さも、その意識なさのためだ。

でもそれは一種の素朴だと見られる、眞なる美、眞なる善は聖なる流れがある故だ。意識ある

人間、悪もなし得る人間が意識以前の意識に復歸して、もちかけなき道を歩むとき、その美こそは聖なるかなである。

## 2 「なぜ」といふ目へ温衣を着せろ

人間は「なぜ」といふ論理の眼をそこへ注ぎ始めるのだ、丁度美しい無邪氣な赤兒が少青年になると等しく。そこに科學の發足がある。科學の發見發明はその程度での論理的な明るさでしかない。そこには客觀的な見方にしか見えない、そのまゝでは血は流れてゐない。發見發明をこそ自然への降服と見、自然からの無條件な惠賜として感謝すれば、より高い神秘の温い衣に抱かれる生きた科學にまで意味づけられるのである。

## 3 數が物言ふ時代

一秒一秒に血は凍えて行きさうな寒さの最夜中に、燃えしきる心臓を抑えながら氷を割つた。圓い氷は悲鳴を上げて割れて行く。

彼の室には彼の外誰も居ない。



彼は氷を額にしぼりつけて思ひつづけた。

革命家はすべてから解放されてよい。病魔などに惨敗してたまるものか、宇宙の宏大を知らぬか、人生の嚴肅を知らぬか、無理解な外界に憤怒するとき「いや同じ血が流れてゐるのだ、——民族的な革命を帯んで生れて来た人間だ」堪へよ忍べと胸をおさへた。

しかし彼は又強みを見せて叫んだ。

すべての人間に嫌はれても言はねばならぬことがある。

眞理が俺を責めたてる。美が俺を誘惑する。聖なる力が僕を躍らせる。唯一人でも進め、それこそ社會性なのだ。

さうした強みを見せた彼は又氷を割りながら、此の態は何んだ。腹が立つ程貧弱だ、彼は彼が貧弱だと輕蔑しさうな他人と大違ひ無い彼なのだ、終日の讀書、終日の教授位に此の發熱は何事だ。

彼の周囲にはトルストイも居た、ムツソリニーも居る、カントも居れば、ヘルバルトも居る。

ケマル・パシヤも居れだ、日蓮も親鷲も居るのだ。デイルタイもフツサールもゐる。

自由主義、や創造主義、自學主義や動的教育に血迷はされぬ以前に、もうキンデルバンドも、リ

ツケルトも握手をしてゐてくれる。

彼は新刊書に埋れて發熱したのか

彼は思ひつづけた。

俺は、知つたふりする頭だけの人間かしら？ 讀書中毒か、氣狂だと言はば言へ、どんなに變だと罵らうと、俺には人間らしさが間違はないで生きてゐられるのだ。

職員會だつて「數が物言ふ」時代なのだ、如何に時代だとは言へ「數が勝利」を占むる時代に俺などの眞底が分かるものか。

だが俺は友をうらむことはないぞ、頭下に俺を馬鹿にするのは、つまらぬ俺のことが先方の頭の中へ引ツかゝつてゐる友の愛なのだ、横道から出たよ、その綿のやうな挨拶には却つて愛がないぞ、卒直な罵りの中に認めてゐてくれる助力があるわけだらうよ。

病床。

缺勤の淋しさに加へて雪はみぞれに變つたらしい。兒童からの招き聲が、みぞれに交り頭の奥から聞えてくる。

學校中でのやんちゃ組だ。教師すべてからの總攻撃を受けてゐる俺の組なんだぞ。



また、このみぞれの庭で相撲でもとつてゐるだらうな。

補缺の先生が、かん／＼に怒つてゐるだらう。實に迷惑をかけたもんだ。

彼は彼の組が相撲場を作つてゐる態を思ひ出した。

熱の頭には天井が硝子戸になつて、その向ふには中庭が見えるのだ。

「おい、そんなところで相撲をとつてはいかんぞ」と看護の児童が世話をやくのだつた。

「運動場ならなほ邪魔だ」

「ここは中庭だぞ」と、二十坪の教室ではしほれ勝ちのSが看護の上級生を困らせながら鉄をふり上げて土を盛つてゐる。

綴方の好きなHは

「土が物言ふとるぞ、許す、許す、相撲場を作れ」などとちやれてゐる。

ぼかんとやられた上級の看護當番は

「何んだい、此の組は女まで相撲取るのか」

土運びをやつてゐる同級の女兒に、むかつきの矢をむけた。

「私たちにはこれより連がないんだ」男まさりの女兒共は、暗に學校全體から仲間はずれにされ

てゐるのに、食つてかゝる形のひとり言を——肩の棒で調子をとつて言ふ。

とうとう、彼の組の級長は彼の前——校長をはじめ皆の先生のゐるところへ看護の児童によつて引っぱり出された。彼の組は、

看護の生徒は勿論他の先生をてこづらせた。

彼は困つたことだと思つたが彼の組の児童が無理だとは思へなかつた。

#### 4 運命にだつて意志がある

彼はどうかすると仲のよい同僚と戦つた。崇敬する校長と議論をした。

「君は僕を馬鹿にしたね、僕に反抗するのかさうした最後の通牒をあびせかけられたとき、彼は答へた。

「私は反抗なんかするもんですか、私はむしろ、あなたにおべつかたれたい私にこそ反抗してゐるのです。私だつて人なみに成功もしたいし、認めてほしいから。しかし私の人生觀があなたの人生觀にぶつかるんです。私はその兩者の人生觀の戦を共に我子のやうに涙でながめてゐるのです」



二人の議論がいつまでも平行線上を走つたり、後もどりしたりしてゐるのに気がつくとき、  
「俺の友達になつた人は不幸だ、俺を部下にもつた校長は氣の毒だ」と彼は議論をポケットにね  
ぢ込んで歸るのです。

「愛するものにだつて腹が立つ」これは運命だ、運命だつて意志といふものがあつて積極的に人  
間へ働きかけることもあるさ。

## 5 平凡なところから兒童がぶつかつてくる

「先生！」「先生！」

兒童が尋ねて來て始めて彼はその日の時を知つた。

「ね先生、今日は馬鹿におとなしかつたんだ」

「先生が休んでゐると横着が出来ないんだ」

「なぜだ」と。彼は分り切つた反問を出して置いて、ことによると亦今日意外な事件があつたの  
ではないかと心配をつよけた。

「讀方の時間に、鐘が鳴つても先生が來ないので、みなが騒ぎかけたのだ」

「さうすると、一番やんちゃんの、ね先生、組の大將のBさんが、「先生の留守に騒ぐやつがあ  
るか」てどなつたんです」。さつきから黙つてゐた頓智のKが答へ。

「だから先生、明日は學校へ出て下さい、横着が出来ないから」

「はは……さうだ、さうだ」窓の下で女兒の聲がした。

おやツと立ち上つてKは障子をあける、彼は床から首を上げて

「Oさんたちか、お入りなさい」

彼の病床は新刊書と兒童で埋つた。

入つて來たOたちは口を揃へて

「先生明日は學校へ來て頂戴」と。

「先生は今、目が見えないんです」と彼は答へた。

「わたしたちが引ツばつて行きます」

「耳も聞えないんです」一同は一寸困つて沈黙した。

頭のよいIが



「先生は本をよむに體でよむんでせう、僕等の言ふことだつて體で聞いて！」と明日からの出勤理由を肯定した。

外のものは手を打つた。

彼は思ひ出した。

「字を目でよむな、言葉を耳で聞くな、考へるのも、讀むも書くもみんな體でやれ」と、嘗て暗示したのでつた。

彼の教育可能原理の中には一寸見たところ感覺以上の直觀といふ、スプランガー一派の理會以上のものがあつた。又、それだけに彼の教育は感覺を最も重んじた。

「よしッ、ぢや、明日はきつと出ませう、それより一つそ私のこの室を學校にしよう。今までの人間が古い目と耳を失つて新しい力の目と耳を持たにや駄目だつて言つたことがあつたつてね、あんなむづかしいことをよく覺えてゐました」

「で、で、あのう、先生、今迄の文明を目と耳の文明だつて言つたでせう」

「ありがたい、言葉だけでもいゝわかつてくれ、俺の言ふことはむづかしいんだ、——うんさうだ、次の文明は體の生む文明だ」。

彼はもう病苦を忘れて起きてゐた。

教育界を何度去らうとしたことが、彼はそのとき「はッ」となる。その吐息の中に眞の教師の姿を直觀した。

そして新しい教育觀を胸に抱いては兒童の前に土下座してゐる。

「やあ亦雪だぞ」

「今晚はうんと降るぞ」

「積れ、つもれ」

男の二三人はもう外へ出た。

「そんなにあばれちや、きたなくなつてしまふぢやないか」

「ぢや雪は何故白いんだ」

「白いから白いんだ」

「馬鹿な」

「ぢや草は何故青いんだ」



「ちや椿になぜ櫻の花が咲かんのだ」

「先生にきけ、きけ」

「先生だつて知るもんか」

あれだから他の先生をいぢめることになつてしまふのだ、彼は別なところから児童の姿で彼を押しつぶしてくるのを感じた、そして「夕暮」を一つの理由にして児童等を歸へらした。

一人の彼は考へた。

冬といふものを目前に置いて來し方の自分の運命に指を觸れてみた。

児童は平凡以外の何かを、それ／＼もつてゐる。

「雪の白いの」「椿の木に櫻の花の咲かぬわけ」それは彼には分らなかつた。「平凡だ、平凡だ」と投げ出さうとしても、児童等の無意識に近い呼びかけは捨てられなかつた。

いつとはなしに村吏員の道德觀にぶつかる、校長の藝術觀にぶつかつては、日本の未來の暗さをみつけたやうに驚いては「獨り行くのかな」「そして笑はれて」。かうした男たちが手をつないだら社會學を解決するであらうものを。

最初彼は眞一文字に自己の生は自己の人生觀にぶつかつて見る、そして安價な生活態度の肯定

を一段高いところからの權威者らしい力でぶちこはしては「まだ／＼俺の内には根づよい民族の血が流れてゐるわい」と彼は彼自身の頭の美しさを信用するのであつた。

誰でも一人でよいが「俺が日本に生れたことを日本のために喜んで呉れるものはないか」と彼は思ひつゞけることがあつた。苦笑しろ！ 苦笑しろ！

「あんなに児童が縋つて來るんだもの」

「だつて俺にはそんな縋られる資格なんか無い」と矛盾した二つの論理を兩方共肯定する。

非合理主義の哲學も今の彼には一面の眞理として實際生活へ實在の姿となつて現出する。

彼はこんなものを書いたことがある。

## 6 孤獨交錯こそ社會性

お前は孤獨と同居する男だ

ひとりではない

お前は孤獨でありながら連れのある男だ  
死を思ふ男でありながら



生に執つこい男であり得る、

晝はきらひ

夜はきらひ、それで

何れも好きだ

死好

夜嫌

生好

晝好

死嫌

夜好

生嫌 晝嫌

死夜嫌

晝生好

夜好 死好

晝好

生嫌

夜嫌

死好

晝嫌

生好

ごたくと統一してゐる男だ

亂々の道程を

變化と見ず

進歩を己は知らずとも

他人に暗示する男だ

孤獨が雜沓して

音無しの音にめさむ二十九の男だ。

自分の活動が多くの人に無意味に見えようと、それは辛抱する、それよりは私の信するたつた一人の人から裏切られることがどんなに苦しいか、かうした彼を傲慢だといふならばそれは眞理の美しさに弓ひくものだ。



## 七、歴史にのらぬ人々

歴史にのらぬ人の空

午後二時。雪晴れ。

彼は金持で遊んで暮せる身分でもないのに拘はらず、これといふわけもなくたゞぼんやりとしてゐるのであつた。

何しようつてんだ、人生つてやつは？

存在するつてふことによつて輝かしい世界なら——たとへ方五米の土地でもよい、蟲けら同志で住むことにしよう。

良吉は彼の室に入つ來た。彼は机の前に座つて雪明りに人生の長さをもてあましてゐるところであつた。

——やあ今日は雪のお蔭で親に對して社會に對して氣兼ねなしに遊べるな。と彼は笑つた。

——こいつは一通りならんもんです。遊んでゐて明るいなら問題でないんですが。良吉はつゞけた。

もう卒業してから三年になるんです、青年團でも表彰されて、親の仕事は、牛が草を食ふやうにやつてるんですが、それでも單調で、退屈で——寝たら忘れるかと思やあ、翌日も亦同じことなんです。

「良吉は氣が狂つた」「良吉は神經衰弱だ」といふんでせう。「仕事はせんでも自分の好きなところへはどん／＼遊びに行けるのだから長吉病だ」と村の友達は皮肉るんです。病氣なんてことは結構なことですよ、人生に退屈してゐる人には、もうけものですな、實際、毎日々々、繩と腰掛をもつて、似合ひな松を探して歩かなくなつて、親切な人が眼先へ刃物をキラ／＼さしてくれます。

——まあどうだ、假病も大抵にしようか、と彼はわざと笑つて見たが、もう二人とも危険に捕へられてゐた。二人の退却はおそかつた。

——親の仕事をあれまでに働いてそれでも人生に退屈するところをみると、ありや私の仕事で



はないのです、あれだけのことなら誰にだつて出来ます。あれだけのことをするためにだつたら私は生れて来なくてもよかつた人間です。百姓、軍人、官吏、商人、そりや職業そのものに人生悲劇原因を見つけようとはしません。『お前が百姓の中のあれをするのだ！ そのために生命を授けてやつたんだと』どこかで言つてゐるんですけれど、』でも、もう一度治つて、やつてみたいんです。

——お前は哲學にのまれたんだ。

——いえ私は狂つてはゐません、復讐するんです。金あるが故の貧乏人への冷笑！ 健康が苦笑する病人への無自覺、ことによると私は一生この病體でゐると言ふのでせう。

彼も五年程前は、この良吉であつた。

病院へ通ふ道で出合ふ人々の健康、知覺を失ふ程健康が憎かつた、病院の待合室まで入つてはツとした。そして私は、髪の赤い人が他人の頭を求めて見廻ますやうに、鼻の低い人が、鼻のみつからぬまでの人を求めるやうに同病者をあさつたものだが、その味方は皆恐しい敵であつた。社會の敗慘者の群が彼の味方であらう筈はない。

教育とは小學校卒業後の青年男女を救ふことだ。

雪の地上へ太陽の光は照り映へた。二人の心には不似合な程明るかつた。

二人は雪の地上を歩いた。二人そろつての黒い足跡。これこそ人間への裁判だ。

——人間は一足ごとに地上を汚すのだ、一言毎に地上を亂すのだ。

——先生ごらんなさい歩いて來た足跡を……

足跡は黒かつた、何人も踏み出さぬ最初の一步ではあつたが。

彼は考へた、

社會の進歩はグアキンによれば競争だ、それを信ずれば、此の一步は良吉と俺との社會での闘争の形だ。いや相互扶助だ、二人は手をとつて歩いてゐるんだぞ、クロボトキンは二人の間を結びつけてゐる、だつて二人はお互の足でお互歩いてゐるのだから、競争もし、相互扶助もできろギディングスの教へだ。

二人は目當なしに先刻から歩いてゐた。

——おい良吉、もう犬が先へ此處を歩いてゐるぞ。 彼は自分の思索には極めて相當な連絡で



突調子なことに驚いた。

——先生、人間の足跡と比べてごらんなさい。

——人間の足跡はないよ。

——犬と人間、金持と貧乏人、健康者と病人、二つならべて歩かしてみるか。

——人間なんか、面だけみえる鏡の前へ立たせたつて顔色一人變りやしない、でも雪はいゝな、みんな歩いてみたいな。

二人の周囲には、いつの間にか、いくらかの墓石が並んでゐた。良吉は墓石を抱いて泣いた。

——よく死んでくれた、人間は早く死ぬに限る、長生はきつと地獄へ落ちる。死んで極樂へ行くものは病人と貧乏人だ、病人こそ長生する資格がある。貧乏人こそ長生しても罪を犯さぬ。あゝよく死んでくれた。

良吉は一寸よこしたんだな。彼は思ひながら良吉の無意識に蹴ちらした雪をみると、そこには無言の生命が萌えてゐた。

——死んでなるものか、死は罪惡だ、人間の犯す最後の罪は死だ。彼は良吉を抱いた。

——良吉よ見よ、この草を。墓石に隣りしてゐるのではないか、お前の蹴ちらした雪は青い生

命を保護してゐるぞ、破れた一枚の葉も、折れた一寸の技も、お前のこの皮膚だつて、みんな消すことの出来ぬ力をもつてゐるのだ。

二人は寒さの限りを吸ふてみるやうに雪の上に座つた。

——先生、あなたは、もう此の土地にはゐられないですよ、第一、歴史を創る人々に興味をもつてゐないといふことがいけないのです。「歴史に乗る程の人になれ」と一度でも教へたことがありますか、私の父なども、「あれでまあ、よく先生がやれたものだ」と言ひますよ、私たち子分があなたの室に集ることがよくない第二なのです。そのためにあなたの家の板塀はテニス網のやうになつたのでせう。ばら／＼と砂礫が先生の思想や行動に挑戦してくるでせう。そこで皆にこんなことを言ふんでせう先生は、「地球を子供の玩具のやうに思ふがよい、必要なときは極く必要だが、でないときは全く忘れて、そこらへほつとりぼけを喰はして置けばよい、ふみただくにししようと、徒らな不用な穴をあけやうと地球はだまつて廻つてゐる。歴史に乗らうなどとは思つたこともないさ、どん／＼歴史を創る人々をのせて廻るのだ。眞のえらい人間は、日當りも蔭も同じなのだ、最上級の人間は、地球と等しく、子供のオモチャだ、君等は、世間の立派な人々を尊敬はしろ、しかし、その人々の行爲そのものをそのまま摸倣するな。秀



吉もナポレオンも偉いことはえらいがなあ……。』などと。それがいけないのです私たちは、先生の言葉の極端さを知つてゐます、性辭の突飛さに不平もあり、先生のことについては、自分の親にさへ遠慮せねばならぬこともあります、でも此私達子分は先生との間にこの矛盾を兩方共ぐん／＼肯定して行きます。先生を最高の誘惑者とみることが人類への義務であると考へてゐます。私たちは先生とのつながりを、心地のよい地獄だと思つてゐます。私たちは先生に名譽慾といふ感覺を抜きとられてしまつたのです。それでも、先生の手招きには犬ころのやうにみながころがり込みます。

つまり先生の哲學が先生の體をこの土地から追ふのです。先生の子分はみんな氣違ひになつて行くといふのです。

——いや俺は驚かぬぞ、お前が哲學に讀まれてしまつたかも知れないことは心配するが、私の存在なんか誰も意識してゐるもんか、只良吉！ この私には若い人々からうける相談をどうすることも出来ない年波を悲しむのだ、卒業後のお前たちを、どうすればよいのか、その責任にばかり毎日を追ひ立てられてゐるのだ。

そこへ君や榮二君などが先頭で私のうちへ乗り込んで來たのだ。

——それは先生、あなたが近頃、小説をよんだり書いたりなさるのがよくないのです。それが先生排斥ののろしです村人の不理解は先生の勉強を自滅の動因とします。

先生に、K先生やN先生のやうになれてつたとて無理だが、先生の藝術は遠からず先生を此の地から追ひ出すでせう。

——お前にも今に分るのさ。藝術は無の立場に於て美を存在せしめるのだ。私にここに永住したいことも、ここから脱れたいことも、何れも私を美の世界から遠ざける。良吉君、執着の超越こそ美なのだ。私は生活が美であればと思ふのです。一種のニヒリストこそ極致の藝術的哲學家なんです。空こそ存在であるとは——最も生命に觸れることなんだ。生とは全、全は美である限り、實在の極致を美とみることも一つの結論である。美醜の存在と否とは主觀の純不純の告白である。そこで主觀の態度の純なるものを愛と名づけるなら、

存在を愛するといふよりは

愛するが故に存在するとみなければならぬ。

單なる知的認識論者は、存在をこそ認識してやらうとするのであるが、それは對立があつて美——生——全の極致ではない。私は一切を裁かないで認めやうとする立場にて實は已を空しくし



て絶対自由の形式に遊ぶのである。——そこがこそ私の藝術にも走つた理由なんだけれど、一見崇高に見える藝術も、その形式に於てのみ自由なるを皮相と見られるのだ、藝術は道德の内容的絶対自由への路上の一步から批評され易いのです。

まあ、あつさりと僕の奥にも宗教のあることを信じてくれ。

——ちや榮二君はその宗教的色彩の道德を先生からもぎとつて行つたんですね。

——さうだ、どちらかと言へば、君は私から哲學を、榮二君は宗教を運んだのだ。いや君等の生活に教へられて私はだん／＼藝術的な生活態度になつて行つたんだ。

良吉の眼は輝きそめた。彼はそれを見つめて立ち上つた、二人は墓石の間を縫ふて歩いた。彼處此處に燈がまたたき始めた。雪の夕はひし／＼と冷氣が思想を固めさうだ。

——良吉見よ。文明の燈を、科學の世界のみに立て籠るから今の教育は、お前のやうに卒業後を苦しめるのだ。お前は科學の學役を明るく見て來ただらう。それだからお前は今泣くのだ、私だつて科學の教師だつたら、もつと地位も上なのだ、もつと父兄からの受けもよいのだ。

科學のみを高潮するのが學校だ位に思ふ人々に包まれた私の壽命が短いのは當然だ。しかしお前達が苦んでゐるのを見ては、私は海の底を歩いても見よう。

忍びよる夕闇に二人は佇立した。

犬の遠吠えが聞える。犬は食をもとめてゐるのだ、人間の醜惡を呪つてゐるのだ、二つの影は動き初めた。

——良吉、飛ぶ鳥が見えるか。

——先生、お蔭で太陽の照る晝よりも今の方が眞の鳥が見えるやうです。一羽の鳥の姿に「永遠」を見ようとする私には肉眼のきらめく晝中は却つて私の思索を亂します。

——お前は哲人といふよりはもう藝術家だ、見ゆるものゝ中に見えざるものを見る力こそ藝術の極致だ、藝術の絶対は表現不可能の境を表現してゐるのだ。罪人である囚人の間にある美は、文字の力を不能にする世界なのだ。眞に清められた幸福は秘める罪を告白した瞬間から恵まれるものだ、見よ、この幸福を避けて死んで行くものの多い世の中を。

狂へる二つの魂は闇の中に黒繪のやうに足跡を残してゐる。

良吉を一人人間らしくするだけで彼の教育事業は完成だ。



良吉を送りとどけてから、かなりの時を費して、それからどこをどう歩いたか、彼自身狂ひに狂つた。長い冬の夜はまだ明けない。

風致保案林の端から大蛇のむくろのやうに海の中へ倒れかゝつてゐる黒い防波堤は白い波に絶えず喰ひつかれてゐた。

彼は蛇のむくろの上を歩んで先端まで出た。

——實に變だ。良吉の病氣についての了解は生みの親より、老人の祖父にあつた。祖父の應待は良吉の現在の狂態を人間生活の一部過程として肯定してゐる。俺を排斥しようとしてゐる村人の動作をくさしてゐる。『俺の體に血の流れてゐる間は、何！ 村長が何と言はうと、校長がどうしようとお前を此の村の學校から逃がしはせぬ。お前に逃げる氣さへなけりや、俺がきつと引つばつてゐる。』

良吉の病氣！ そりやお前の爲だとも、それが教育ぢやないか。』彼は思ひ出しながら、むくろの上にあをむきに倒れてみた。

波打ち際まで雪に埋つてゐる海岸に、言葉少なに物を言ひ交して漁夫が二三人出て來た。たつた一筋の漁村の街は、まだ靜かに寝てゐる。凍つた雪が沖へ／＼と走るにつれ、風は森に

吹きつけ漁夫のつづれ着物を吹き過ぎる。赤子を背負つたおかみさんがやつて來たと思ふと。

——おや人がゐるぞ！ 防波堤の先に。それはたしか受けもち兒童伸夫の聲であつた。

感覺の鈍い土がまだ東を振りむきもしないうちに空は一面に曉の光を吸ひ始めてゐる。

やがて船は下された。今まで砂まじりの雪にしがみついてゐた船は、まだ十二才にしかならない伸夫を乗せて丁度息切れから更生した一つの生物のやうに沖へ走つた。

——今日は日曜だつたなあ、と彼はもう一度しつかりと心に念を押して見た。海岸を行かうか、山路を行かうかと思ひながらも足は止つてはゐなかつた。

雪を踏んで彼に近づく足音を聞きながらも振り返へりもしなかつた。——朝日による人影が長く彼を追越した。

——先生！ それは榮二であつた。

——今先生のお宅へ参りましたが見えませんので、たつた一つの足あとをつたつてこゝまで來ました。

先生の思想に土下坐してゐる私は、先生の足跡をまで慕はしく追ふてゐるのです、新しい運命觀の上に新しい宗教が生れさうです。



かなりあせつてゐながらも時々私の心は行き詰つては退屈します。今日はこの退屈への刺激を頂戴しに來ました。

——ではついて來たまへ。

彼は方向を川づたいに山路へ向つた。雪はところどころ消えて、土は眼を見開いてゐる。二人は生物の土の上を歩いてゐた。びよいと飛んで二人は向ふ側の土手に上つた。斜に心もち低くなつてゐる小徑に氣づかぬ二人は一寸難儀して上つた。爪先にけられた土塊が、ほちや／＼と水中へころげた。

長い土手の先に一つの小さな土人形が機械仕掛に鉤をふり上げてゐる。鉤先が光りながら彼等二人の目の機會を切つてゐる。

——良吉君は先生の家へ來ますか、

忘れてゐたのでないのに彼は胸をつかれた。

——昨夕べ尋ねてくれたんだが？

何も用事を意識しないで二人は良吉の家の方向である土手を右へ下りた。

門先で焚火してゐた良吉の父は田圃に行く身装をしながら急に働き出した息子のことを思ひつづけてゐるのであつた。

父は自分の敵が無くなつたやうな氣がする。あいつを學校から追ひ出せと祖父と争つたことが馬鹿な速断であつた。

それにしても長男の良吉に狂人仕込みをしたのは無目的ではあるまい。村長から學務委員の家へお百度踏んで彼を排斥した追想がすだ／＼のぼろ切れのやうになつて脳味噌を包み始めたので、

——これは最も平凡な現象だ。といふ理由を見つけてみた。

——學校の先生なんでものは、一つの旅行者だ、この寒さに疲れ凍えて雪の上にもよ／＼でゐる我々親子を救ふともせず、押しよ／＼も只一夜の宿を村に求めて泊り込んで、『自由な一秒間』の中に、内の良吉を氣違ひにしてしまつたのだ、こちらから行けと言はなくなつて先方は、もう出發の用意が出來てゐる筈だ。だが先生といふものは案外無智なものゝ味方かも知れん。村で評判の悪い奴——それこそ、そんな連中がみんな、先生の家へ集るんだから。ことによると、あの村會で問題になつた小説も、案外、こち等の味方かも知れんぞ。



無精者の村はもう一九二〇年頃から眠りつづけてゐるのであつた。小作料に減首された村の人々は朝飯を食べに起きねばならぬ免倒はなくなつてしまつたのである。

七年後。

こゝでも人々は自分に不似合のことを興するのであつた。一度も箒をあてたことのない庭の陽あたりに二三鉢の萬年青は並べられて、からつほの牛小屋からはカナリヤが囀り始めたのであつた。それでも無精者は起きなかつた。

時間までもが、地主の私有財産になつてしまつたこの田舎では夜となく晝となく只疊の上で牛になつて居ればよかつた。

牛どもは寝ながらに食べられるものもなく、食慾よりは、談話に興味をもつた。時にはすばらしい目だけの討論會などがおつばじまつて、

——今ではもう働き好きなどいふ派手な趣味は全く無くなつてしまつた。といふ結論が皆に同意を求めてしまふ。

それどころか、その結論の主張者が盜棒であることは、此の村は年中夜でもかまはぬことになつてしまつた。電燈も不用であれば、寒い夜などには雨戸を脱つして薪代りに焚火することも無用

ではなくなつてしまつた。

地主どもの日が暮れる。

ところが思ひがけない夜襲。

外科的な治療の夜が村を占領してしまつた。

カナリヤの牛ごやも、灰の雨戸も、一人あたり四十立方尺の室も、手垢一つない九十度の階段のやうな戸棚も、穴の中にある鍵のかゝつてゐる箆笥までが、地主によつて封印されてしまつた。それにしても唇だけに封印されてゐる手や足は逆立や、二人三脚をしながらにでも地主の非常線を張らないうちに、風をくらつて都會へ退却を初めたのだ。

地主の非常線は歩くのであつた。働き盛りの青年がすつかり都會へ首つなぎに行つたら、地主は、ほつとりほけくつた田圃に自分の首を突つ込んで自殺せねばならぬので非常線を白粉の女にしてみたのである。

都會へ走る男は捕へられては言ふのであつた。

——私はすんでのことに私の足下の村のあることを忘れるところだつた。

逃げぞこなつた男と村との間には、きつと地主臭い桃色の乳房がくすがり込んでゐるのであつ



た。

都落ちの姿だ。

自分の姿を見るのもいやなのだらう、目を閉じて廣小路を南に折れた青年がある。肩は怒つて、頬の肉を足もとへ落してゐる。青年は話かけるのであつた。

——街路よ、電車よ、大學生よ、若い自動車よ。俺は産業革命のため田舎を捨て、都へ来たんだけれど、もう今は、町の玄關へ尻を向けるのだ。何ぜなら、町は理想主義者だから。——町の門をくぐるの田舎ものは、みんな懐へ、自分の葬式を入れてゐるのだ、町は慢性熱病者だ。只今の症状が女學生の袴のやうに柔くて、患者の方から誘惑されない位の微笑をもつてゐるので、失敗が主觀的形式を取る。町は美しい惑ひのために經濟の戸口を開けて待つてゐてくれるのだけれど、「肉體を町へ寄附しろ。」さういふ爆彈を天井裏にも、映畫幕の裏にも、つてゐるのだ。町の人々が腹から笑つて呉れるなら私は肉體を木ツ葉みぢんにもしてみようものを。自動車をへ不機嫌に走るんですからたまらないのです。眞實の人間は都落ちをするのが權利である。都では機械が意志をもつてゐるから。——それだから現代の人間は労働を意識しないために田

舎を忘れることによつて犯罪してゐるのだ。生活の新しい様式を恵むのは土だ。

おさらば電車道よ、若い學生さんよ、自轉車よ、自動車よ。

青年がやつと村へ歸へると、村の青年は燃えしきる都へ吸ひとられゐる最中なのだ。

——もう夜にげは日中に限る。と言ふのだ。

夜にげた兄のマントを盗んで、今そつと村を抜け出した男は體中眞黒で、兄を探しに行くと言ふのだが、兄が見つからなければそのまま歸つて來ないといふことは、使ひに出した年寄りの母親にも分かり切つてゐる。

放蕩息子の彼が五年振りに家に歸るのであつたが、すぐにも家へ乗り入ねて子供心の記憶に引きづられて村端の森に姿を一時あづけてみた。——何んと奇怪な眺望であらう。

小作どもを振り切つた田圃は地主の暖爐にも相手にされないで凍えてゐてさへ退屈してゐる。——放蕩の子よ、聞いておくれ。地主さんは私たちの腹まで斷ち割つて小作黨としての材料はないかと調べてみるんですよ。ところがそれは地主の後悔だつたんです、土くれが案外にも變



な形なんです。彌助爺さんの耳、彌八さんの足首、宗吉の鼻で、小作どもの體の片々が凍えきつた土塊の中で消化もされないで形そのままでごろ／＼してゐるのだ。

都落ちの放蕩息子よ、見るがよい、さつきからあの道逃げる人間に目鼻のあつたためしがな  
いから。

森の草では子供が遊んでゐるのであつた。

——兄さんはどうした。

——あんちゃんをらん。

ほう、父さんは、母さんは。

——みんな寝とる。

村で働いてゐるものは村主の口と子供だけであつた。

子供からの話では、もう村に青年は居らない。

こんなに空虚が村を占領しては、地主がありつたけの金を投げ出したところで充ちさうな筈も  
ない。

最後の一人だ只宗吉を村から逃がさぬことだ。

もう宗吉にも順番が来た。

村に歸つた彼は、草の上の子供を使つて宗吉を森へ呼んだ。

——どうしても村を出るのか、俺の捨てゝきた都へ。

——村にゐたら焼芋一つ食べられやしない、まあ靜かに考へてくれ、地主と小作との白兵戦はつまり、小作の負けなんだ。全權委員は虜になつて——やつと多少の意を見せた負傷兵は溝から這ひ上つて村から遠のいて行くのだ、それは金をもらつたとも言ふんだ。看護婦は地主の壘で茶をのんでゐるらしいし、斥候兵は敵の裏門で番兵になつてゐるのだ。幻の都こそ生活場だと思ふのだ。

——コーヒの香位に誤魔化されてゐるんだらう。恥ぢさらしを言ふんだ、俺が村を逃げるとき、お前が都のスラムの生活をきかしてくれたんだ。

すつと敷居をまたぐと、十五六足の下駄、家賃一疊二圓、もうそれだけで父の収入は消えてしまふ。あとの缺損は借り食ひといふのだ。

街頭を歩いたつて、命の洗濯になるやうな材料は落ちてゐない、天保九年生れだといふから、



九十歳を越えた年寄りが馬糞拾ひをやるといふのだ。

——だつて博物學者は嘘ついた。草食べて生きれるでなし、田舎の空氣は汚れてゐるのだ、自分一人の呼吸さへむづかしいのだ。

村は火のない火葬場だ、あれ見い、あの屋根を、あれは皆屍だ、何千といふ。

——だが田舎の死は、電氣さへかけりや生き返へる死骸なんだ、お前までが、からつほの村からむりにこぼれ出ないで辛抱してくれ。俺は、お前の口と目とをとり違へてゐた。——労働を捨てる氣だろう。放蕩息子らしい地金を出して、宗吉を村に止めようとした。

——馬鹿をいふな。人生は工場なんだ、君の一時、のろけた象徴を必要としない程俺は直接労働を戀ふのだ。

——いや待て、お前の人生の深さは實力主義の現實的なものだ、五年前俺が都へ走るとき百姓の生活を勧めたのも現實以上のものぢやなかつた、それに今また、その氣もちで都へ行かれちや、却つて人生と労働とをひきはなす板塀建設位の努力だ。時に、あの氣狂ひ先生どうした。

——もう學校も空らつほだよ。

——こんな時には氣狂ひの判断が當るもんだ、あの先生にお前の田舎脱出を聞いてみる。お前

の都行きは賛成だと、俺の出るときや反對だつたぞ、やつぱり氣まぐれ男だな。だが、あれ位の先生でなきや時代がもう承知しないだろ。

——さうだ、もう退職したんだ。

——先生がゐなけりや、巡査はどうしとる。この小作爭議に。

巡査は家を空にして躰をかいてゐる。夢に怯へて、飛び起きて見ると地藏堂の中へ地主と小作から避難してゐたのだ。寝工合の加減で頬の横に赤い條痕をさらけ出してゐる。破れたポケットからは澤山の無名の手紙がはみ出てゐる。

——地藏さんと寝るのも、もう大抵にあきたいものだ。いつそ村から青年が無くなつてしまや世の中は明るくなるんだ。だが宗吉一人が骨だ。

巡査は呼び使ひの八方攻撃で疲れてゐるのだつた。

宗吉と彼とは取組んだまゝ、田圃へ落ちさうになつてゐるのだ。

もう今では土手の横で二人が泥田の中へ落ちないやうに助け合ふやう力を出してゐるのだ。



——氣狂先生は言つたぞ、俺には都へ行けと。

——俺には田舎でくすぶれと。

森の子供が駐在所へ走つた。子供の力で引っぱり出された巡査の妻は氣もちだけせき立て、喧嘩場へ急ぐのであつた。

——喧嘩を仲なほりして下さるのは地藏さんだよ。さ！みんなでお詣りませう。

巡査の妻が子供の誰よりも先に石地藏へ手を合せるのであつた。

× × × × ×

彼と榮二は良吉の門先までも行かないで後もどりした。

榮二の心は今此の片田舎を脱出しようとする心で一パイだ、その心で良吉のあの働きぶりを見てはすつかり自分に失望してしまつた。

——先生、社會性なんて技巧ですか、

——教育だつて技術だよ。要するに、すべて感覺を重んじなければだめです。

——私は父の仕事を十分手傳つてゐます。隣の人々は私のことを孝行息子だと言ひます。そこ

で——良吉君は今迄不孝者でした、仕事はいや／＼なら、せぬがよいと言つてゐました。ところが今日の働き振りを御覺なさい。實に光つてゐます。

——内容の深いものの表現程技巧が勝ち過ぎるやうに見えるんです。それだけ感覺の力を必要とします。私は現代の人々に、もつと感覺を重んじさせて、もつと技巧の尊さを變つた目で見てほしいと思ふのです。

——でも宗教は技巧でないでせうね、本當に心をごまかさずに味つて見ると「死にたくない」と、はつきりしてゐます。今日の良吉君の働きぶりを見て、あの瞬間からすつかり私の人間が變りさうです。

——あなたは、技巧といふのを、そんな意味にもつてゐるのですか、現代的な宗教は生を暗示します、宗教に失望する人は宗教を「死の指導」と見るからです。宗教が社會性をもつには最も技巧的でなければなりません。無技巧の技巧こそ表現の極致である。營業化した宗教や僧侶專賣の宗教では、まづい技巧が勝ち過ぎるから、宗教こそ技巧を排斥する人間魂の問題を基調とするやうに見えるのです。

——一生を無意味に終らせない機會こそ、今日の面會です。つい先き程まで私はうろつゝゐ



ました。何かをもつてゐるものは不幸だ、何ぜなら、いつかは失はねばならぬから。何事も死である人生は一切空だ、私たちの逃げ道は只一つの死のみ、——私の後をつけてくるものは死のみだつたのです。しかるに私は今日先生を雪の海岸でみつけました。氷の中で土いぢりをする良吉君をみました。良吉君はその働きぶりを先生や私に見られたことは知らずにゐます、親への手傳であることを知らずに働くあの技巧こそ魂の光だ、私は良吉君にどんな感謝をしてもよい、かうした私の心の變動を知らず歛をふり上げてゐる良吉君こそ幸福な神です。現代の人の多くは生きてらしい死に方でせう。良吉君こそ死んで生きてゐる——生きた生き方です。良吉君の生は先生そのまゝです。家事も手傳はないで遊んでゐた良吉君は、地位に憧れた名譽を追ひ金を掴まんとする根性と戦つてゐたのです、私の家事の手傳こそ良吉君の遊び以上にこの根性がはびこつてゐるのです。

最も生きてゐる人間は意識を全く失つた機會に見えます、あゝした先生の魂があらでもこちらでも働いてゐることは求めずして得られる先生の勝利です、先生は此の村の人ではありません——民族に飼はれてゐる生物なんです。いや人形なんです。

——淋しいことです。その勝利を意識したいのですから。

二人の呼吸づかひがあらくなつた、空氣そのものまでをさらつて行つてしまふやうな激した風が吹き出した。路傍の雪をまくし立てて行く、その中を二人は歩く。

——宗教的な眞理は進展するものです。時の網をくよりつつ新しくなると同時に國土などからも或制約を受けるのです。世界的宗教には國境のないはづの佛教や基督時にも時と所によつてその色彩を異にしてゐるのです。

勞働階級の基督に宿つた神は平等愛を唱へ民衆的であつたのが、元來感情的な基督教は理性的な獨逸民族と衝突して宗教改革の難にあつた。社交的な米國人に入つたこの宗教は社會事業の中心となつて働いてゐる。

佛教だつて瞑想的な印度佛教が、哲學的な支那佛教となつて日本に渡つて現實的なものとなつて祖先崇拜とよく溶け合つてゐるではないか、藝術に哲學に科學にすべて現代化してゐる今日宗教のみひとり絶對的な硬化物ではあり得ないのです、といふよりは榮二君、この新らしい藝術哲學科學を生んだものこそすでに新しい宗教的な基調の存在を意味するものである。

美の世界、神の世界が一方にあることは他方に醜惡な人間の世界のあるものと二元的な見方を



するのが今迄の多くの宗教であつた。マリヤの腹に宿つたキリストは神の子にして、その御教は神の福音である。アダムの昔から先天的に罪を負ふ人間を心から憐み給ひ自ら十字架に血祭りして人間の罪を贖ひ給へりといふが如く、霧のやうな奇蹟に立脚する宗教が現代人の生を暗示し得るか、現代人の自我の醒めは在來の宗教を己が前に跪かしむる勢である。現に榮二君、君にしたところで、我を忘れて(盲の意)神に跪いた祖先の態度がおかしいだらう、我そのものを觀照して主觀の不思議に驚き、もし神あるならば人間自身の創造であり、眞理であると言ふ氣がするのであらう。それが普通の現代人だ、ことに青年處女の現在は神も眞理も實在もすべて理性の斧に價値づけようとしてゐるのです。

職業も地位も人類もあらゆる一切の舊思想から解放されて、あらゆる権力と偶像とを打ち碎いて自ら豫期した幸福を味ふとしてゐるのです。しかし

榮二君、それは丁度今日の君自身が最も新しく、そして現代人の行き詰りを代表してゐるのです。君の今日は『自我の幻滅』だ、しかしそれを君自ら發見したところに眞の宗教が生れるのだ、君は宗教を捨て、新しい悩みを發見するがよい。

科學の斧、理性のメスによつて自我盲目の思想を解剖した君乃至現代人は破壊そのものでし

た、自我の幻滅であつた。言葉の上でこそ囚はれない自己とか大我とか言つてゐるが現實の我は根強い運命に翻弄されつつある不自由な存在でしかなかつた、大威張りに打ち立てた人生觀、弱小な人間の強みには更に無頓着な大自然はさつと人間の豫期に逆流したのである。

榮二君、君の努力によつて出來上つた人生の目的意義は大自然の前には自らわざと紋り出した徒らな自我の悲鳴でしかないでせう。一旦見開いた知識は今となつて、つぶらうにもつぶれず。事實理性をもてあましてゐるのではないでせうか、それかと言つて盲目な昔の宗教信者にもなれず、強いて力めて祈つては見るものの現在の宗教教義はどうかすると砂を嚙むに等しい。自己を投げ出して信仰せんとすれば直ちに自己に醒めた理性が皮相にも冷笑を浴びせかけてくる。古着は捨てたが新しい着物はなく、いや／＼ながら汚れきつた裸體をまる出しにもなり切れずとうたう内心の分裂が始つてしまふ。

光を求め悩んでゐるものには強さうで却つて隙のあるものだ、いつかも話したやうに革命には静けさの強みがなくてはならぬ、革命がすごさの力のみだつたら大きな隙がきつとある。暗の中に迷へる現代人には大本教も一時的には育つのである。自稱の神も現はれるし、むやみな懺悔者ぶりも流行する。溺れるものの藁をもつかむことは悪いとは言はぬが、眞の宗教を求め迷



つてゐるもののある證據として宗教の代用品が流行する。自彊術、氣合術、靜坐法、賣卜者、

——等は、現代者の行き場のない我の空虚はこれ等でその穴埋めもしたくなるのである。

理性に勝ち誇つた冷靜がりやの現代人は内面かなり感傷的にあはてふためにゐる。進むに路なく住むに家なく、放たれた者の淋しさは、もとの牢獄にも歸り得ず、さてこれからどうしやうと淋しさに泣きくづれてゐるのだ、榮二君さうじゃないか、僕だつてさうだよ。

二人はもう彼の家に着いてゐた。言ひたいこと聞きたいことで埋つてゐる體をどうすることも出来ず、無言のまゝで手傳つて火鉢に火を起した。——そうしてやつと無理な體を落ちつけた。——では先生は、科學の後に宗教がなくてはならぬと仰しやるのですね。——では現在の學校は……。

——制度とか經濟の問題もあるのだが、要は魂の問題だから教育とは教師の魂の問題です。

彼の最初に受持つた組はもう今年徴兵適齡であつた。かつて高等科第二學年を卒業せると同時に「相助會」なるものを創つた、年若い彼等には會の名はあつても規約はなかつた。只在村中の

會員を幹事として、その幹事のもとへ己の住所を知らせることにして、小僧や船員やそれ〴〵郷里を離れた。

其の夜

彼の家へ五人七人と押し寄せて來た。

——俺達の氣の合つたものが一つ所に集つたらどんな仕事が出来らう。

——やつて見ようではないか。

——おいそれは駄目だぞ、一人は東京、一人は名古屋、一人は田舎といった風に所々に點を打つたやうに皆が暮して居れば、それが一つのポイントになつて丁度一つ社會的な強い網になるんだ、その方がどれだけ社會的な仕事が出来るかしない。氣の合つたものなんぞ、さう一所に往めるものではないのだ、第一運命の意志が許さぬ。

——だつて都の華かさはもう、あき／＼したよ、「文化よ、待て、お前の力はよい、只その方向が變だぞ」と言ひだくなるよ。

——ラヂオの發明が文化で、人類は科學の奴隸だ位に、人間の自由を考へてゐると、それは人間界の滅亡だよ。



—では、そこに宗教の情熱が要るんだらう、と榮二は口を切つた。

—おい、騎形的な發達をしてゐる片田舎にゐても、結構なことが言へるな、と都會生活者は言ふ。

—科學のみの文化を抜き去つたなら何物も残らぬ都會生活者は、君自身物足りなく思つてゐるだらう。田舎へ来て見たまへ、土の香で人らしくしてくれから。良吉も言ふ。

—田舎物はやうやう話が始まるのか。

—都會者は水蒸氣だから困る。

—都會もよい、田舎もよい、それで兩方ともいけない。だが、私の信念がお前達を殺したことになりさへしなければ、どん／＼未知の世界へ進むがよい、思想の程度もあることだから形としては、父をすて、母を殺し、兄弟と背合せしたことになるうとも、人間性の目に見えぬ力に引きづられでゐるうちは、

教育のお勸語に悖つてはゐません、人間は因習や制度のために美しい心をかくすことがある、人間は機會に捨てられないやうに働くことだ。と彼の言葉に元氣づいたSは

—では、現役をすましたら、もう一度滿州へ行くんだ。と、大變よろこんだ。

—えらいな、Sは、何といつてもSが一番遠いところへ行つてゐるよ。

—いや、をれがニューヨークへ行つたぞ、

—おい世間知らずの船員赤いぞ、

—お前は黒いか、

—みんな元氣でうれしい。赤だとて、その他にすべての色を吸ひ込んだからこそ赤いのだらう、表現はすべて内容ではないのだ。赤いも黒いも青いも、どれもよいぞ、だがそれは色であることを忘れてはならぬ。

とに角光は一旦すべてを吸ひ込むがよい、それから各自が生きていることは、

赤人、青人、黒人、黄人、……が東京で、大阪で、船の上で、郷里の土の上で、しつかと個性に生きるのだ、いや、生きることが個生なのだ、個性こそ社會性を生むものだ、現代的に言ふならば、社會性は個性の網なんだ、人生を悲觀するものは、自分の歩き方の分つてゐない證據だ、光を吸つたまゝで各自の反射色をみつけ得ない人が孤獨に泣くことになる。

もち／＼してゐる人間は、意志の御機嫌をとつてゐるからだ、意志は捨て、置けば、とつと一人歩きをするのだ、その男こそ、勇氣が湧くその男こそ正直ものなのだ。



——一寸、待つて下さい、正直すぎると社會は却つて疑ひはしませんか、

——社會は却つて虚偽が愛せられるといふこともあるが、しかし、その成功は、地位を得るか金をつかむか、といふことなんだろ。

虚偽に愛せられることが、やけるのは、地位や金のほしい人なんだろ。

——すべての人間が先生に教つたら歴史といふものが無くなりはしませんか、

——そりやそうかも知れんね、だが沈黙の人々てつたやうな人間の集り史は出来るんだ。私の古い教育觀を話すことにしよう。

## 八、教育と過程

——人生は過程なんだ。

教育は技巧なんだ。

教育學は奴隸學なんだ。

若し私が教育學を書くんだつたら、意識なしの技術學として教師論を中心にするんだ。

### 1 永遠なる現在

——歴史——現在——未知

君達がかう言ふ技巧にあやつられて來たんだ、——だが教師の技巧だなーと、いふことを君達が意識してはよくないんだがな。——だから私の獨語を板塀の外で君達がそつと聞いてゐるんだ。

刹那は刹那である。來るべき刹那とは別な現在なんだ。無論過去の刹那では代理は出来ないのである。



現在の刹那はそれ特殊の意味に於て價值(あらしむべきだ)がある。そして、將來の刹那や過去の刹那も現在の刹那の代理が出来ぬからこそ、それ／＼の特殊な意味(價值)があるのだ。即ち現在の刹那こそ過去將來の刹那への代理が出来ぬことなのだ。

此の見方によると刹那は、それ自身特殊な意味を持つてゐる——特殊な價值を與へらるべきだ。刹那は「ある」の現實として同種なもので、價值化せらる「べき」特殊で「ある」のだ。論を飛ばす。

人間には意識の流れがある。「自己」とは、その意識の流れのうちの現在の一點へ注ぐ批判の眼である。

體驗自意識に前後を感じ、去るもの来るもの——そこに過去將來があり、間隙のない永續的な経過が存在する。連続的な無限——そこに便宜的な刹那を考察上部分とするとき、刹那は孤立でなく、「永遠なる現在」である。

刹那こそ特殊な普遍——不可分の普遍的無限の特殊的實在である。

現在は十年後の歴史であり、過去の未知である。刹那は人生問題に取り入れられるとき、價值づけられる現在である。

## 2 意味

——存在理由——

人生を價值網創造の一々の結び目としやう。

刹那を實在としやう。

動的不可分の普遍的無限を本質とする刹那なる必然連続を通じてのみ生き——生活するものを

人間とするならば、

人生は過程である。

價值創造の過程こそ人生そのものである。さうした人生の尊さは刹那の充實より他に道はない、刻々の充實、人生價值の増大には緊張が必要である。緊張には専念、——一への意識活動、意識を意識せぬ活動そのものこそ意味ある人生である。

無論それは時間経過、刹那の流れを知らずにある過程としてである。

刹那は人生への必然な恵まれものであつて、活動そのものに必要な意識内のものではない。

人生の意味(價值)を知る人を人生觀のある人と假定して話をすゝめて行く。で

人生は主義ではないが、刻々の將來主義、刹那的な連続主義、現實的な理想主義と見てもよ



——抽象の個々は研究(主として科學的)の便宜であつて、一切を抱括しての個々にその適當な位置を與へて存在理由を示すのだ。

鼻は鼻さ、鼻が耳だなんてことはないさ。耳は耳さ。だが耳は體で、鼻は體でないといふことはない。目が二つあるからえらくて、耳は横にあるから、へぼいといふこともないさ。耳が憤慨して顔の眞中へ來たけりや、耳は自殺するの外はないのだ。

ところが鼻は耳で、耳は目で、目は口だ、といふことが、生きたものゝ本質なんだがね。その解釋は割り切らないで置かう。

價值(意味)を形式的に見ると、

「普遍を如何にして把握するか連続的な過程の中に意味は生れるものだ」

絶対に直續する價值なら主觀客觀の統一よりの認識でなくてはならぬ、そしてその最高なものは一意識され得ないであらうが、意識され得ないからこそ一刻も捨てることなく魂は追ひすがるのである。

理想は主客統一體たるの絶對性を有するものであつて、個々のものとしての孤立の現實を許さない。個々のものに實現の力を與へ、存在の理由を明にするのである。理想は斷片でなく、一切の統一者であり、一つの力である。理想の力そのものは現實には認識乃至直觀となつて現はれる。故に認識乃至直觀の對象は價值でなくてはならぬ。

理想を他の一面から見る。

理想は主觀的着色を有すること多大であり濃厚である。それが必要でもあり且つそれから脱し得られない根本屬性である。けれども絶對的のものなる以上客觀性をも含有せしむべく努力せねばならぬ。——そこに理想化は「普遍を如何に把握するか」の問題となり、價值認識、價值直觀である。

主觀的着色を脱することの出來ない理想そのものゝ認識、直觀が人生へ對して無限性を與へ動的たらしめるのだ、即ち創造の過程たらざるを得ないのだ。

普遍の根本的な屬性は客觀性を有することである。そして主觀を脱することの出來ぬ人間の理想の力によつて、その普遍を認識、直觀しやうとするのであるから嚴密な意味での満足な結果を得ることの終局はないのだ。人生は最後まで完全で不完全なのだ。そして最後まで不完全



であればある程眞面目に理想を追求し、刻々緊張させることは一種の人生の不思議な尊さではないか。そこには不斷の活動と進歩とがある。

而しながら現實の實踐經驗に即して見ると、それ〴〵の程度に於て完成することを許さねばならぬ。自覺者の人生は刻々完全なものでもある。現實に内在する理想の力は一つの無限性を帯ぶ力としてすべてを、それ〴〵の程度に理想化して行くのであるから、それはその時その度に於ての完成である。完成を程度からすれば、それは一つの終りであり、同時に始めである。完成は終りであり又始めである。

こゝに現實的な人生へ相對的な價值を許さねばならぬ。(相對的な價值といふことは言へないことにもなるが)。人生過程の中にはそれ〴〵の程度での理想を完成して相對的な價值を創造して行くのである。人生は動き無限に連続し行くのだ。

相對的な價值は、それ單獨にながめて特殊であり、その屬性を所有するが故に絶対に直續する價值への過程となり得る内在性を有することになる。その内在性こそ他の相對價值で代理の出來ぬ特殊として普遍に合し行く尊さである。そこにこそそれ自身の存在理由をもつ。

この絶対に直續する價值を獲得實現せんとすること、即ち「如何にして普遍に合せんとする

かの過程」を所謂價值創造の根本原理とする所以である。それが人生である。

アルベキの世界が理想の世界であり、それが完成は永久に來ぬものであるなれば、——そしてそれが人生である意味から云ふと價值問題は理論的認識乃至實踐的經驗の世界へ對する情意(主觀的着色の濃厚な)の反應である。理論的認識も實踐的經驗も、人間生存の或る動力の原動に他ならぬ。その原動力を私ばかりに衝動といふ。

であるから、價值判斷への過程「普遍を如何にして把握し行くか」の問題は衝動を如何にして理想化(理性化にあらず)して行くかといふことになる。

衝動の發動が如何にして最深の理想に合し行くかといふことなのである。

### 3 乗鞍山上の朝化粧

#### ——理想化——

生存上の必要に應ずるため生得的に有する發動傾向、現在の我に不満であるため、その不満から脱せんとする、二つの人間發展の根本動力を衝動とします。

何物かを渴望する快感を求める方面から情的分子をみとめ、その成就に走る運動傾向を一種の意志要素と見る。その目的方法を意識するとしてその知的要素をもある。



情的要素の強烈は勢ひ、盲目運動となり易いが、その強さを人生の活氣と見たて、原動力の頼母しさとしてそこに精練指導を人生過程への責務とする。

経験は時間と空間との二大豫想を通じて衝動を精練するの必要を警告し、そこに自己を認め所謂自我發達の過程となる(實は普遍へ合し行く姿)

衝動の欲望は常に一個であることを許さぬ、——そこでそれ／＼の程度に於て理想に照すのである。渴望獲得前の不満不安のモジ／＼した感情が加つて動機となり、如何なる結果を得るか先見としての志向がこれに伴つて歩一步と理想を實現しつゝ人生最深要求への過程での或る段階として完成の價值創造を行ふのである。

衝動の理想化こそ、特殊の普遍化即ち價值創造である。——その過程こそ人生である。人生にある煩悶は否定か肯定か？

雷鳥を追ふて乗鞍山の頂上で遊んだのでした。

雷鳥にはどうしても首が二つあるのです。一つは目を明いてゐると見える。一つは目をつむると見えるのです。

私ばかりに、「感覺の首」と「意識の首」と名づけました。

乗鞍山の朝化粧は、夜の明け初めぬ前に出来上つてゐる。だが雷鳥は懸命の羽ばたきのみで空間的にはちつとも左右上下しないのです。

感覺の首——河岸の化粧柳の林が見たい、そこには平和があるから。

意識の首——平和は孤獨だよ、御花畑に行かう、友達があるよ。

感覺の首——百花の中に深山車獨り香ふてゐるから、勝負の跡が見えすぎていやだ。槍ヶ岳の大雪溪をよちて見やう、蒼天への道だから。

意識の首——向陽の斜面にりきんでゐる黄金の花を化粧柳の單純林の蔭へ植ゑかへてやらう。みなよ。若い人々よ。雷鳥の胴は一つだぞ。

價值創造は自らを否定することなのだ、一つを否定することは他を止揚することだ。

肯定はその程度に於て理想實現の終りであるとしても一步高い理想の最初である。普通な目でみるといゝやな否定こそ人生創造の妙味である。不斷の否定こそ特殊を普遍化する原動力である否定が停止でなく動的であるとき、常に一つの胴はよく二つの首を生かすのである。

——欲望を次から／＼と否定するとみれば、人生は欲望と理想との争闘である。だが欲望を絶



對に否定するのではなく、人生過程中の何れの部分に於て實現するかの指導である。所謂矛盾せるAとBとを抱括してのOの實現である。時間空間の二經緯の何れの處にて實現すべきかと理想への相談である。Oの現出はABの生活である。——一見争闘と見ゆる程人生は嚴肅なものである。

否定にしろ、肯定にしろ解決することは自我へ持ち來ることである。自己たるの意識を有する統一體、一切を抱括する主體があつて始めて解決を與へるのである。

自我意識は當然、相對立を豫想する。宇宙の大原理としての自我は終局であり、原始的のものであつて現實の刻々に具體的活動をするものは相對立を意識する自我である。對立の自我は主客の統一體を否定しない、それあるがためにその終局に向ふ活動が生れるのである。

自我はすべてを支配せんとしてゐる。肉體も精神も、それらの位置に於て存在の理由を示す。個人そのものが、社會乃至國家の如何なる位置（位階勳等にあらず）に於て如何なる理由あつて存在するかを解決しつゝ活動を連続するのである。

故に自我は一方己を何處までも特殊化し具體化し個性化して大宇宙に唯一のものとしての光輝ある存在物とするのである。それと同時に、その特殊化具體化個性化自身が、そのままで普遍

化であり理想化であることになつてゐる。これをこそ人生價値の創造と言ふ。——この過程を人生といふのだ。従つて自我實現などといふことは、もつと別な氣もちで新しく意味づけられて行くのだ。

#### 4 教育者の臆

——特殊であるからこそ普遍に合し得る。人生は特殊への自己教育である、教育は生活である。人生は自己教育の過程である。自己教育は社會網の伸展である。學校教育は、私の自己教育過程の一部である、如何に科學的に學校教育を定義して独自の内容を具存せしめても人生を離れた教育はない。流行的に人間味ある教育、個性尊重などといつても、事實學校教育は干からびて行くのみである。

教育改造の第一歩は教育者自身の人生觀そのものから出發するのである。仙人の寢言であらうと、青空への駈走であらうと、哲學への遊びは、永久に——人間滋養のパンを焼くことであらう。



教育の本質を研究するものに心理学を基礎とするもよい。しかし心理学は如何に發生的研究をしても、それは教育の方法論の一真理を示すに過ぎない。まして心理学から教育の目的などは生れない。

摸倣の心理過程、注意乃至興味心理過程をどんなに研究したところで、心理的な行き方は分つたやうで、その實、行き先は分つてゐない。

教育思想は行き方でもあるが、むしろ行き先を第一基調とするであらう。

新教育思潮による教育のあのごたつきぶりは、教育の理想と方法との取りちがへからも來てゐるであらう。澤山な新教育思潮をみせつけられても驚くことはない。愛は教育者の臍の問題だ。教育は生活である。学校教育は人生過程中の一部分である。教育者に人生觀なくして教育の理想の分らう筈はない、眞理は平凡だ。平凡がむつかしいのだ。

## 5 平凡な対象

思考の力を恵まれてゐる人間が

思考し得ぬ動物にふみにぢられてゐる現實を

思考し得る人間——社會にのみ  
光はさし初める。

常識的に自明なこと

(1) 在る、ことはある。

(2) 考ふる、ことは考ふる、ことで。

在るとは何か、考へるとは何か、と詰問したら馬鹿だなあと一笑に投げすてるであらう。しかしその馬鹿が「今迄最も明瞭に解つてゐたことに對して始めて新しい不思議を感じたとき、この驚異の念から人は哲學(藝術、宗教)するやうになる」といふてゐる。

哲學は皮相な科學者や經驗論者や常識學者にとつては、閑人の屁理屈であり、馬鹿の迷盲であり、哲學に氣のない人から見れば哲學の對象は、全く、「平凡」な解り切つたことであらう。

哲學するものは、常識者の最も「明瞭な、——在る考へる——そのうちに最も不明なものを發覺する。實驗實證實在など明瞭がつてゐるものを假定だと意識するところに哲學が生れる、科學的な認識を無假定の實在だと信じてゐるから認識論を難解の不要物視する愚鈍さをさらけ出すの



だ。

古代、學と呼ばれたるものは今日の科學哲學宗教道德などの渾一體であつた、それが時の流に従つて分化の傾向を示し、星學教學醫學などと科學は獨立の色彩を鮮明にして來たのだ、その間哲學は宗教教義の説明論理とされた一切知識を總括する全體的の學とせられたりして哲學の任務に特別なものを與て呉れなかつた、そして科學と分離しないで十七世紀を迎えた。當時最も確實と信じられた數學に力づけられて一層高級な全體的の學問に高めやうと努力する學者デカルトホッブス、スピノーザを出し、人間を内部的に見るに至つて心理學的傾向も示した。しかしいつまでも哲學を曖昧な混血兒にはして置かなかつた。哲學は科學的認識の批判學であるとカントは哲學の任務を明白にした。哲學は假定の檢察認識の批判をするの學とした。諸科學の根本の學として重要な地を踏むことになつた。科學は哲學を忘れようとしたとき科學の根本假定を批判した。十九世紀になつて科學は自ら假定の地盤にあることを忘れて終局的な世界觀人生觀を決定しようと、よその畑へまで足を入れようとした。そこで馬鹿者の哲學は汝等の自稱哲學は更に根本假定たる足もとを氣づかないでゐると、科學萬能の荒波から生きふき返つて「カントに還れ」と叫んだそこで明晰な科學者は自ら哲學的反省に組した、そして眞の哲學は「明瞭に意識された假定の上に立

つて、そこに入り來る諸現象を記述説明する學」となつて科學は假定に立ち哲學はその批判であると、科學と哲學との間が關係づけられた。

皮相な者にはそこに問題が起る。

科學に假定などあるものか、科學は經驗に出發した事實に即して説き、實際證明し得ることのみを持ち出す故に科學こそ眞に無假定である。科學的といふことは無假定的といふ明白な安心の出來ることだ、哲學こそ假定であり空想である、理會證明されないことを信じてゐるではないかと。

其は或意味で確實である、科學は「假定を想定しない」しかしそれは或る立場のみに固執するの愚味であつて他に高き立場のあることを知らない人で眞の科學者であり得ない。假定なるが故に空想であり偽であるといふ假定はない。しかし出來上つた知識からは顧みられないで然もこの知識の成立のために必ずその基礎に許さざるを得ない根本條件としての假定は科學にある。——あらねばならぬ。

科學には假定がないといふ理由に經驗をもち出すが、その經驗とは何ぞ、そこに反省の目を向けるとき、「科學は何かを經驗することが可能である」といふ經驗可能を許容し、經驗された事實



の在ること即ち客觀對象の存在を默認してゐる。かくても科學（科學的認識）は尙無假定の世界に愚味を發揮せんとするか。

そこに知るもの—主觀、知らるゝ者—客觀。そしてその兩者間に關係の成り立つこと—知。主客の認識關係（經驗可能）を根本的に許さねば科學者の經驗も存在も説明されまい。

カントは「如何にして經驗は可能なりや」と科學の根本假定へ詰問してゐる——そこに經驗可能を成立せしめるアプリアリを論出してゐる。哲學は科學のアプリアリを檢察する科學批判である。實驗を尊重する物理學は「物質」といふ或る物を假定してゐる。こゝに亦論あるともどりするが、物質は假定でない、在るものは在る、明白の事實だと、しかし哲學は、あるからある、では承知しない。有るものは無いものを基根としてゐる。その何人も見捨てゝゐる平凡な對象に驚異するのだ。どうも科學は、ある立場にのみ立て籠つて他の立場のあることを知らないでゐる否、哲學は立場以前にゐる、科學の足もとに暗きを批判して立場の立場に目をひからせる。

藝術教育だ。芝居はならぬ。軍事教育だ、國家主義は時代錯誤だ。などと、ある立場にのみ立つてゐないで、その立場にゐる論者そのものゝ怒鳴る根本假定をみつめて全體的な流動の人間性

から血の出るような叫びを擧げたいものだ。立場は角度がある、決して圓ではないのだから、論ずるものも反逆するものも各特別な立場に立つていがみ合つてゐる。切つても血の出ないやうな、ひからびた合理、非理の知的論争にのみ走らないで、加工されない其の實在をにぎりしめて超理的（反理知ではない）な立場の實在をつかむがよい。

誤られた藝術教育にのみ加擔もしない、しかし干からびた科學的な行き方にのみ組したくもない。藝術と科學、藝術と哲學乃至宗教についての關係をみつければならぬ。

平凡な對象に目をつける人、かうしたつまらぬことのみ考へてゐる人間も世の中にはゐるものだといふ——平凡な對象を意識してほしい。

——先生或る人の歌へるものに

ばらの木にばらの花さく

何の不思議にはあらねども、

ども、ども、何ぞか

はつきり割り切れない。



赤き花赤しと見つゝ、白き花白しと見つゝ今は足らへり。

と。あるでせう。

——私も、もうすっかり疲れた。彼は彼の教師觀兒童觀を論理的に口述することを恐れて中止した。

會合の始めから一口も物を言はないBは隅で、しく／＼泣き出した。

學校時代低惱といはれたBには皆の話も先生の教育觀も言葉としてはちつとも受けとれないらしかつた。

——おい泣くな。隣りの一人が慰める。

彼は思つた。

泣きたいときに泣くなと言ふ位その本人への慘酷はない、恥を忘れて泣くことこそ唯一の慰安である場合が、お互人生の中にある。

——おい、さうして置け。とささやく不親切らしい一人の言葉に彼は、胸の中に用意してゐたことを、すつかり見抜かれたやうに、どきまぎして、不用意な言葉の出さうなのをやつと食ひ

止めた。

だまつたまゝ別れると

朝鮮へ入營した一人から手紙を受けとつた。

雪の原に雪の山

私のあこがれて来たところはかうしたところでした。

兵舎に入ると、私の心はをど／＼します。

新兵！ どこかで呼んでゐるようです。

心を落ちつけて、こゝでも何かを學びませう。

彼の教へ子は特殊な角度で彼へぶつかつて来る。



## 九、特殊な角度の群

—教へ子からの手紙—

1

どうあつても私はいゝのです

けれども「詩」だけはすてないのです

おゝ、だがそれさへも

詩の美は どこにあるのです、

さうしたものは、愛といふものは、遠い古し失はれて、足を洗つた樂園にあつたので  
す。

ある運命づけられた淋しさを抱いた海邊に砂を踏んでみます。

でも故郷の濱は春の月が 空にひつかゝつてゐます、私の青春を泣かせやうとします  
苦るしみと一日の疲れの後にはどろんとした休息が包んでゐます。

2

亦明日は勞働を賣りに行きます。

先生のお頼りを待ちこがれてゐました、そこへ急に優しいお言葉が舞ひこんで來たの  
です。僕 御無沙汰ばかりしてゐます。東京へ來るとき一度お別れに行くのでしたが  
ごた／＼してゐるうちに東京へ來てしまひました。

東京には喧嘩する弟や姉が居なくて淋しかつたので、めそ／＼泣き出したこともあり  
ます。

しかしにぎやかで大野と云ふ故郷の親味をもつた所は東京には見つかりません、家を  
出るとき父の心からひゞいたことは、子供らしくせよ、といふことです、夜になると  
尋常五六年頃に習つた唱歌を歌つてゐます、東京中の街へ私の聲が先生の歌と一つし  
よに流れて行きます。

先生どうぞ喜んで下さい、星は光つてゐます、美しい天女が法燈をもつて天下つて來  
るのを頭で浮べて私は宗教の生活に入つてゐます。



親の愛を受けてどん／＼伸びて行きます

そして暖い春の日に おぢいさんになつた先生の所へおたづねするつもりです。

それも今四十年位でせう、

先生のにこやかな顔に笑を一ぱい現してお迎え下さるでせう。それが楽しみです。いつまでも／＼、お忘れにならないやう、ちよつと先生に甘へます。

3

先生久しく忘れて居た酒の香も、やるせない淋しさに、入港の今宵それを味は／＼には居られないのです。更けた夜の静かな酒場の一隅にうまくもない杯を上げて心を酔はす私はほんたうに弱いつまらない者です。

酒氣に酔ひ人々のたのしげな笑ひに、そのかされて彷徨として足の向ふ處、そこには何物かに飢えた船人の心をいやしてくれる女がゐる、淋しい心を酔してくれる五色の酒もある。

美妓の酌、飲む酒に總てを忘れ相×してねむるものは何者ぞ、豊饒なる×の××、そ

こにおこる變態的な船人の淺ましい慾望、これは善か悪か、美か醜か、歡樂の巷には理性も道德も何の力もありません。しかしながら

醒めて感ずるその悲哀、前に倍した心の苦しさ、あゝ涙も嘆息も心をいやしてはくれぬ無用物、よし狂か悪か。

眼前に迫る徴兵検査 歸郷して無邪氣な土の上の同輩にお目にかゝる日の姿を——黙々と狭苦しい船室に味氣なく今しばしをと心に鞭打つてゐます。

仲間よ

どうか俺の魂を傷つけないでくれ、と言つた友とこのどん底生活にありながらも私は出来るだけすなほな純な心で、よし私どもの自由な青春の時を奪ひ行くとも何時までも若々しい純な子供心で美しさを保つてゐます。

でも肉體は船室に縛られながら、自暴となる心は四圍の境遇と相待つて放縱に流れます、私の生活、そこに何の尊いところがありません。先生からのお便りに、尊いといふ文字の見ゆるとき私は胸を文字にえぐられます。

教への師に對してかうした荒んだ己の心を文字で訪れることさへ間違つた人間ではな



いでせうか。

先生私の目に映るものは皆分らないものばかりです。

明日は日曜埠頭に横付けを幸、船をのがれて山路をあてもなく辿るであります。  
仰向きに倒れる草原位が目あてです。

4

先生、卒業して恐らく二度目の訪れでせう。小生今度僥倖にも二高理科へ入學を許可されました只今明善寮へ入寮しました。これからは忙しくても手紙で御話します。

仙臺にて

5

雨の中を家へ歸りました。

懐かしい故里とはいひながら私の心は知らぬ他國に旅をした時の様です、まだ氣がそはくしてゐます。でも私を産んでくれた土の上です、今日はもう父と山畑に出てゐ

ます、一週間後は徴兵検査です。

6

一昨夜歸つて來ました。

——とは思つてきても、やつぱり駄目です。

人がといふのか 村の空氣と云ふのか

病的にきらひです どこかにひつこんでゐたいのです。

あいにく今日は祭で

若い衆の仲間へゆくのがたまらないので、ねてゐるのですが、それでも太鼓が、いさ  
んで通ると障子の破れ目からのぞきたくなるので、裏口からそつと鉾をかついで出ま  
した。

7

暑中御見舞



先生私は何と云ふ感情を抱いて大野のなつかしさを離れたでせう。その時の涙は永久に忘れることの出来ないものです、先生私は上京する前、美しい篠島にゐました、そのとき二度とこないあの六年のときのことを思ひ出しました。

叱られた後濱に出て自然の美しさをきかされました。あの血の涙をあの島でしみくくと味ひました。唯淡いこの夢を如何に人生におり込みませうか、私は成功を望みませんただ自然の讚美者となるばかりです。

雨が降つて春が暖くなつて行きます。教子を送る日が近づいてくることは、きつと寂しい事です私も毎日あの「仰げば尊し」を歌つてゐます。

東京へお出になつたさうですが何かいゝ收穫はございませんでしたか、きつと御忙が

しいでございませう。

春が来て私の顔も色付いて参りました元氣がどこからか歸つて参りました。

もう大丈夫です終日働いてゐます。

勉強時間が短縮されたと事更に云つてみたいのです。

大變周圍が明るくなつて來た様な氣がします。

フリツプは誰よりも私に強い感銘を與へて呉れました。

笑ひはない蒼白な顔の底のギロギロした眼に感ずる彼の投げつける親しさ、彼の歩いた後を私も歩いて行きたいのです。

蟄居の日から私は間斷なく續けて來たことは文學的な呼吸であることは勿論ですが、

こゝに大きな人間的な進出を見出したのです  
思想エンサイクロペチアも仲々に狭い限りある私の頭へも色々なことを教へてくれます。

私も世の裏か見えるやうになつてしまひました今日の親切も××でないのです。



一度お話がしたくなりました。

10

昨晩は色々有がたう、

何時に變らぬ先生のお心づくしに皆んな喜んでおいとましてから月の夜道をなれない自轉車で歸りました。舊い時は去り新しい時代は次から次へと生れて来る。獨り後れて、だまり込んで舊い道をたどつて行く偏狭な私です。

先生、私は冷かな人生の傍觀者です、己自身をも冷かに眺めては皮肉にも己を否定するのです。これ程淋しいことがありませうか、もう、私はくだらない自己批判から一日も早くのがれたい、そして人生の中へ飛び込んで人の味をかみしめてゆきたいのです。だが

人の世界は闇である理想主義者の様に遠くに光明を私は認められないのです。人生は花火でせうか。パツと閃めいて、パツと散る。心ゆくまで一瞬のうちに享樂を求めて行けばいいのでせうか。空の星が笑ふとも、私は疑惑のとりこです。

116

淋しさに誰かをよびかけたい氣が起つて來ます。にがい酒を飲みたくなります。更けた夜のほこりだらけの場末の酒場に、淋しい心で、空になつたコップをじつと見つめてゐたいのです。それもやがては消え失せて五體にみなぎる血液が凍つてしまつたかのように私の心は無感覺になつて行くのです。それでも  
ほつと、忘れたやうに朝の光に汗する孝行者です。御安心下さいませ。

11

先生私は今に俳句で甘んじてゐます。

堤一つ里押ししかくす枯野かな  
わだちある事を道とす枯野かな  
山茶花やまだ日高きをかける庭  
時雨ふるや障子染めたる圍爐裏の火  
晝は人の出入る裏戸や枯葎  
ふる里や藁打つ音の冬夜長

117



しぐるゝや納屋の出口のこぼれ炭

12

私の頭から理想も空想も去つてただ暗く冷たい鉛の様な現實の苦惱のみが残つてゐます。

未末も明日も私にはない暗い今日の一日のみがある、あゝ私に藝術的才能があるなら悲痛な人生の暗黒面、——読む者をして卒倒せしむるまでに一點の明るみもない世界を描くでせう。そのとき藝術の價値が無くなつて亡びてもよい、私は人生の畫布を暗黒にぬりつぶしてしまひたい、人生の岐路に迷ひつつも私の頭から焦々しさは去つて落ち着いて来るやうです。

鋭利な刀もて腦すいをえぐる様な苦痛もなくなつて冬の寒空のやうに冷かに澄んで來ます。それはホントウの狂人の道程に近づいた前徴ではないでせうか。

13

先生、一番なつかしい古い私の土臺を作つて下さつた先生、私にとつてはお母さんであり一番の恩師です。先生、私は遠い都の空で遙にお慕ひしてゐます、善平君や友七君や石井君等の舊友の人々はもうそれぞれ遠い所にゐるでせう、みんな先生の暖いふところを飛び出して元氣にやつてゐるのです、今年からはそれ等の人の顔を見ることが出来ない先生でせう、私が若し成功したら忘れずにきつと訪ねます。

裏の小川をつたいながらみんなで先生の家を訪ねようとする月見草が咲いてゐる——あの歌を思ひ出してもゐます、かはいさうにランニングの選手一三君は死にました先生を訪ねるときにはどうしても一人足らないでせう。

私は兄が死んだ時自分も死んでしまはうと思ひました。それも運命でしたが私は哲學も宗教も疑ひ始めたのですが、それを解く唯一の鍵はあの小さな小供時のすべてであると思つてゐます。

それは六年のときでした、先生が濱邊に皆を連れて行かれて、自然が美しいか、人生が美しいかと尋ねられました。しかし誰も答へるものはありませんでした。只波のうねりが砂を洗つてゐるばかりでした。今その邊のことが、のみこめて恥づかしいこと



です。

二度と来ない永遠ですが、今に私の頭にこびりついてゐます。  
夏の休みにお目にかゝれませう。

14

下宿の二階で

鼻くそをほぢりながら

夜の港街の情緒に、過去帖の夢を繰つてゐます。

ボヤケタ春の裏に

伸びて行く一つの生命の力がつかんでみたい気がします。

15

それは先生の胸をえぐることであることは知つてゐるんですが  
二人の××者は火鉢をかこんで黙つて泣いてゐるのです。

先生と同じ講習に出たことは、わからぬなりにうれしくありました。

先生は私の顔を見ただけで私の憶病さにはがゆく思はれたでせうが、眞實に考へると、  
かうならざるを得ないので。

私は先生に

もつと強く手ひどく手をひつばつてもらうか。それとも、つきつばなつしてもらいた  
いのです。

只一つ人間に愛てふものがあれば。

16

寒中御見舞

北風や道の曲り目頑に

天流

17

どろ泥 泥



死ぬことも生ることも

できやあしません

どろのやうな人生にも

泥のやうな私にも

抱き合つて泣くことの出来る野郎が一人でもあつたら——眞も美もありやしません。

ただ只 泥の中で働く中は

うるほひがある位です。

18

桃色のフランネルのやうな春が來ました。

先生はおまめですか、

いつまでも疊の上でお針仕事をしてゐます。お婆さんの娘になつてしまひます。

いつそ女中さんにならうと思ひます、先生のおみこみでお使ひ下さいませ。

泉さんはもうお歩きになりませう、  
こちらの濱へも來て下さいませ。

19

先生の心理學で何とかありませんか、小包で送ります、手紙より

一便後の小包でSの日記が五冊彼のところへ送りとどけられました、彼は自殺のやうに驚きつゝ尙戀ひしくじつと

常用日記 大正十一年

大正十二年日記

1926 大正十五年日記 乙

1924 大正十三年日記 乙 至誠堂

1925 大正十四年日記

ゐます。

表紙をながめて



元旦の聲をきいても私の心はこと新しく目をみはりさうもありません相變らずふし目がちにとぼとぼと闇の小道を辿つてゆきます。

幾等か期待にはすれるであらうと思つて來た軍隊生活はすつかり私の心を虜にしてしまひました。入營以來羅南の天地をうづめてゐた雪はとけもしないで氷になつて行きます。氷雪に凍つた營庭に立つて兵舎のはるか上に、これも氷つた夜空に星がみえます。

いつか先生のおつしやつたやうにどこまで行かふとも何かを意味つけて生きたいものです。

つかみ得なくなつてもいつまでも求める心を失ひたくないのです。

雪の男となつて今に何かを先生のところへ送るでせう。

先生 船は大連に來ました。

先生 あけても暮れても同じことをくりかえす船の生活、いそがしい出帆や入船の用意、そして無味な馬鹿げた錆落しやペント塗にはては石炭のほこりに息もつまる仕事に何等期待も興味もありません。ただ示さるゝがまゝに盲目的な努力を捧げるばかりです。しかし

そのつまらない仕事にでも盲目的にでも努めてゐるときは何んともなく心が安らかです。やはり盲目的な努力でもよい何もせずにはぼんやりしてゐるよりはよいのです。

今のまゝの生活では、どうかしなければならぬ浮草の様なこの心では強い強い何ものかにかちりつかなくては盤石のやうな信念が、強い自信が、決斷がと、じつとしては居られない、いら／＼しい氣がします。

淡い空想に夢みて、みにくい現實にあえいでゐる私はどうしたらよいのでせう。

だん／＼年をとり今まで知らぬことをいろ／＼覺えます。何ごとにつけ複雑になつて來たのです一つの心で一つではない、一つのものも幾つにもなつて映つて來ます。

理屈や文句じやしかたがない。先生のおつしやつた様に沈黙の力ある男として生きて



せう。

ばくぜんとした神秘的な海は、何物も教へてくれないやうですが。

22

先生お手紙ありがたう。私もいろ／＼先々の生活について考へます。

何となく固定的な感じがして数学や航海術については興味をもたないのですが、しかし亦發作的に人一倍かなぐりついてもみまます。

今のまゝの惨めな水夫としてマストによち船舷にさがりして年と共に言ひ知れぬ不安におのゝきつゝ自暴に荒んでゆかうとするマドラスの生涯を思ふと、時にはあつさり海をおさらばして陸に上り一つの種の成長をちつとみ守つてゐる百姓になれば行きづまつた私の心にある尊い動きを與へられはせぬかと思ひます。それでもやつぱり陸をはなれた海上の生活が私のホームです。星をいただき月影をふんで歎をとり天命をたのしむ農夫の氣もちをこの海に求めたいのです。

マドラスの生活に一生をすごし沈黙のまゝ死んで行かうとも、せめてこの蟲けらのや

うな心の一面をでも理解してもらへる人があるならば書き送りたいものです。

急激な水夫の働きや晝夜四時間の交代の生活には睡眠に追はれ通して、ほんとに蟲けらになつて行きます。しかしどんな忙がしい生活にあらうとも月を仰ぎ星と語り得る心の餘祐を常にもちたいものです。

足もとの尊いことを知らぬ私は夢の子です。

この五體をめぐる血液の止るとき、この肉のくさるとき總べては終りでせうか、又それから新しく夢は生れないものでせうか。

眠りをたのしむ男から。

23

原稿を書きかけました、今度は可成り自信があります。冷えきつた魂が何を楯目の中に訴へ並べるでせう。何もわからない自分がどんな解決をすることせう。私自身興味を溢かしてゐます。

一字一句苦心の結晶です。



もう大事の前の健康です

自分の盃は小さい然し自分は自分の盃で飲む。

大きな未来を買つてくれなくても断然×京するつもりです。

24

先生、世は春の暖さでもう暑さをもつてゐます。船は四日市のみなとにど太い鎖をブイにつないで潮路の疲れを休めてゐます。

故郷遠くはなれてゐた心に追ひ立てられて歸郷してみました。

無心な自動車は千々に亂れる心の私をのせて走りました、みどりの林、青麥の畠、新緑の桑畑、自然の静けさに私の心は、今まで求めてゐたものを見ました。

この自然をすて、虚偽の巷、罪惡の都會に走り行く善良な若者の心があやしまれます、しかしこの私が故郷の自然に叛逆してゐるのです。

田園生活、それは詩であり私の欲しい生活です。しかしその百姓の生活それは私どもの思ふやうな面白半分的生活ではない、食ふか食はぬの事實です。無智と罵けられて

ゐる田舎の老爺の生活にどれだけ眞實味が含まれてゐるか。

久しぶりに生れの里へかへつても誰一人心からよろこんで迎へて呉れる者もありません。

「よく歸つた」とたゞの一口も親子兄弟の言葉もありません。

心の奥のお互理解されないのは悲しいことです。お互別れ／＼の心で一つ疊に座つてゐることはたまらないとです。

他人である先生に手紙が出したくなります。

自己否定のこの男の行くべきところはやつぱり海です。

青い空 青い海

私は鷗です。

先生、こゝで荷揚げをすると樺太行です。

樺太は、濃霧の世界、寂寞の天地

小樽から、どや／＼と乗り込む無遠慮な人夫の群一つそ下船しようかとも思ふのですが、先づ樺太一航海、淋しくも私にはふさはしく。



どん底生活の苦惱に吐き出す人夫の唄を聞きつゝしばらく北海の天地に

狂鷗

25

くだらぬことに悶々してゐる奴なんかほんとに氣狂にでもなつてくびでもくゝつて死んでしまへばよいのです。

何物もかへりみない狂人の生活こそ私の力に適つてゐます。いや出鱈目に言ふものはたして悲惨な狂人を前にして私はこの言葉を腹から出せるでせうか。

一時の感情で出放題をいふのですが、よく内心の聲を聞かねばならぬと思ひます、でもちつとはそんな種もあるでせうか、それにしても私にはまだ狂者になり得るだけの眞劍味がないのです。

私は駄目です、でも部屋の中でのいたづらな焦慮は止めて——一躍海中の人となりませう。小學校時代の遠泳三時間の男となりませう。

彼の肉體へ白蟻のやうに喰ひ込んでくる教へ子からの手紙はデメ／＼した腐れかけの彼の體を

こぢあけこぢあけて、お前の肉きれには道德が巢をくつてゐるか、藝術は育つてゐるか、

——哲學だ宗教だといつたところで、今の私には知識は無用だ、世の中は偶然だ、機會こそ神だ、第一先生に教つたことが偶然なんだ、もし先生に教はらなかつたら、今頃はこんなに苦んではゐないかも知れません、或は先生が、もつと別な子供を教へられたら、もつと歴史を創る人々が生れたかも知れません。

先生の道德藝術哲學宗教へ叛逆するものは私たちの「行」そのものです。

彼の肉體は教へ子の手紙によつて、ぎざ／＼に切り細さいちやまけてしまふ。

この肉切れをじつと靜かに拾ひ集めることが教育なのだ。彼の今迄の道德を藝術を哲學を宗教を見返へして更に新しく精進するの外はない。

教育は彼の生活だ、彼の技術だ、彼が奴隸になることだ。



## 一〇、意識を失つた私の手紙

ここまで来れば彼は、もう。彼を

私　と言ふ。

私はこの手紙によつて大變に愉快なつた、兒童を物品だと考へるのです。あらゆる、せまつてくる子供や大人や、聖人や狂人や、道徳や叛逆者やをポケットへも入れてみたり抽斗へも入れたたり、いや私がその筆司の中へ行つたり、錠前をかけてみたり、寢臺にしてみたり毛布にしてみたり、すべて兒童を自分のものにしてみるのだ、人格を尊重するなどと言つてゐたら、意識のあるものは自分の子にだつて腹が立つ、眞に可愛がるなら、意識のない物品だとしなければ自分のものにならぬ。自分を投げ出すことも出来ない。

そこは精神以上の温さをもつ技術なんだ、教育學なんてものは全く奴隸學なんだ。技術學なんだ。

私は全く教育しようとする物品の中へもぐり込んで返事を書くのであつた。

## 1 可愛い物品

私は圓い櫃の中へ入つてゐる多角形なんですから上手に見てくれないと眞ん圓ではありません、そこであなたは、あまり人生の註釋を求めすぎではなりません、私はすまないことですが、どなたでも私のところへ手紙を下さる人を瓶だ位に尊敬してゐます、でもそれには澤山の瓦斯がつかつてゐますので栓をしようとはしません、それはあなた方がめい／＼になさるがよろしい、で私は一見自分の子を可愛ゆがるやうな風をしません、さうしないと、側の人やきもちやいたり却つてあなた方の横腹へ石を投げたりしますから、その代り自分の子を叱るやうなあせりにあせつた馬鹿なせつちちをしません。大勢の群の前で、「一寸見て下さいこの美しい瓶を」と言つてもそれこそ綺麗ですは。飛んでもない瓶が割れて男泣きしたつて皆が成程と思つてくれます、私の子だつたらどちらをやつても犯罪的に笑はれます。私はこの世での最も不幸な弱者ですから、下さる手紙なども、「瓦より差上げます」といふ氣もちでなくてはなりません、くさつた意識をもつてゐるんでしたら無論瓦よりは下等なんですから「おい」なんて呼びかけることが最上



の敬語です。

だが親切な人々があなた方の栓をすることを忘れようものなら、あなた方も存外ぼんやりしてゐるうちに若い瓦斯だけ抜け出してしまひますから、あなた方の知らないうちに私が栓をする教権をそつと使用します。

## 2 善の出納簿

多く道徳家はガラス瓶の中に毛蟲の入つてゐることを知らずにゐるものです、それに常滑焼の中にゐるボウフラの見えるくせに釉薬のない素地であることを知らずにさへゐるのです。道徳は必要以上に使ふものではありませんから自ら道徳の繩をなつてはなりません、鐵網の錆びないやうに心配位はするがよろしいけれど自分の生活する草原の上へその鐵網(意識)をかぶせてもその網目からどん／＼芽を青空へ向けることです、さうすれば却つて道徳は若い人の身を保護してゐてくれます。ついで意識したことのないやうな地球の上に何がころがつてゐるとお考へですか、不平！ 因果、偶然、博士論文か沈黙か——何れにしても知識以前の種子がこぼれてゐるにちがひない、私はその種子を幾

つも知らないのです、教師としての發言は缺伸位の値打ちよりないのです。私のことを人形だと思つてゐて下さい、善と道徳の根本とするならば、善は小賣の出来るものかどうかを考へることです。財布の中に金があるかどうかを調べた上で決心が出来るやうな道徳善を強ひるところが學校であつたら、いくら貧乏人だつて半年やそこら平氣に善人にも悪人にもなれます、それは掛帳を作るだけですから。

## 3 速度からの感情

詩人は健康であつてほしいのです、そして何時も未知の中にあつて秘密をすつばぬくがよろしい、しかし、すつばぬく度に詩は自分の生みの子と共に死んでは亦霧の中を歩むのです。だから藝術はやまらないうです。工場の音なんでものは、これこそ出入帳に記入して置かないと失へ易い貴重品です、それに、も一つ飯櫃の音と灰の量との関係ですよ。——これからの詩は速度のうちに湧き立つて來た感情によつて生れるものですから飛行機の中で口笛吹いたり、線路工夫のハンマーを握る。朝の間の割引電車に乗る。



疊に座つてゐる人の眼を見る。

地球の臍をめがけてタイプライターを叩くことです。鎮守の森の鳥居なんて詩人になく  
てはならぬものでせう、一つそのこと詩なんて忘れてしまつて、手や足で歴史を創るが  
よろしい。

#### 4 それからは自由です

何もかもぶちやけてしまつてくるから——私の力でどうでもなりさうなだけ私は困つて  
しまふのです。あなたの手紙をみると、探してゐたものが見つかつた氣がして勇氣が出  
るのです。でも何時も人生への好奇心をあなたの日頃へ目をむけて結局は迷惑をかける  
ことになるのです。私の行く先をあなたが試験してゐてくれはしないかと、私はするく  
ても若い人から來る手紙をたのしみにして頭を下げます。

洋服を着る詩人が多くなつて、歛を振り上げる學士が年々不足して行くと思ふのですが、  
成功希望者が社會要求の員數から過剰してゐるのですから、成功の定義を變更しなけれ  
ばこれからの若人は人生を捨てることになつてしまひさうです。

一度もみたことのないやう地平線の下から無數の太陽が上り始めてゐる時代相に  
地位、名譽、金、別荘、指輪、賣藥教義、小賣道德、非生産哲學、平面藝術てな巨彈を  
亂射したところで、どの太陽もどの太陽も平氣で工場へ急ぐであらう。  
酒を一口もなめないで明日の朝は丘に登つて朝寢の村へ鐘を打つては如何です。それか  
らはあなたの自由です。

#### 5 目かくして働くのです

時々世界地圖を拓いてみることですよ、日本が何處にあるかを朝の空氣に包れながら  
指さしてみて下さい。電化事業、アンテナの數などの苦になる藝術家であることが大切  
です。哲學者を腹紐にして居る土百姓でなくては地圖を見てもびりびりとしな  
い  
よ。

積み上げた藁束をどう地球が廻轉さしてゐますかあなたは藝術家になる必要はないので  
すけれど地圖の上へ紅鉛筆で記をつけてごらん下さいませ。その擧げ句はしばらく目か  
くしをして馬鹿になつて働かなくてはなりません、昨日の自分よりちつとでも物知り



なつたなと思つたら、口をぐつとつぐんで、黙々と手足を動かすことです。

## 6 馬鹿になるには

馬鹿になるには「しかし」なんて言ふ言葉を決して使つてはなりません。悪いことです。が罪にはならないですから事務的な——機械からでる、ころ／＼とくだらかな會話をすることです、お人よしだと思はれる程外交氣分をなくしてお話をすゝめて居れば、ひとりでに動かなければなりません。

それでゐて腹の中では未知の問題を一つづつ持つてゐるがよろしい。首かしらになるには馬鹿になつて奴隷の氣もちを信條にして明るい活動をつづけることです。奴隷になることは自分の人間らしさをちつとももぎ取りはしません。

私へ手紙を下さる人々一群は奴隷車を仕立て、みんながそれに乗ることを願つてゐます。理性の強い人程この車に案外乗り易いではないかと思ひます、その車の中で、みんなの創つた詩や和歌を働はたらき合ひながら縁／＼と進行をつづけたいものです。車の窓から見ると思ひの外、世の中は美しいものです、眞黒な指でやる子供の萬歳、停車してゐる乳母

車の中の眠る子とキュービーさん、軌道なしの路を走る自動車、晝の花火を見てゐると、ボカ／＼と南洋諸島が出來上つてゐるのです。

同じ車に乗つてゐながら一人で歩いてゐることもあるのですが、そんなときには言葉を選ばないであつさりと會話をつづけることです。

それにしても私はあまり目に見えるところばかりを喋りました、目も耳も鼻もつむつてしまつて生なま土の吐息を聞きたいものです。

## 7 歴史を算盤ではぢく

心の解放を望むであらう若人たち。それは道理だ。

未來をもつから。私もどんなに考たかつて來たことか、でもよく御覽、

先づ街が狂つて今度は田舎が脱線してゐるでせう、自由をどんなに拾つたところで若い人々だつて眼は二つよりないのだし口は一つだろ、二本ばかりの足で何しやうと言ふのだ。

二本の手で極樂が創れるものなら、人類はお互のことだ、まして先のある若い人の手足



なんか縛るもんですか、リベリヤ國こそ地上の樂園かも知れないですよ、歴史を民族別に自由秤にかけてみたら外形的な幸福は知れるでせうが、裏を流れる意識は秤の目盛には現れて来ないでせうから、それも無用なこととせう。それ程人生を急ぐでしたら智恵のいらぬ國から電報をもらふことです。私は今に教へ子が皮相な科學者らしくなつて行くことがいやなのです。自分の暴力を分析してみても日傭人の子はなぐつてもお金もちの息子はなぐつていけないことを日に日に覺えて行くのです。歴史を算盤ではぢいてみなさい見當がつかますよ。

## 8 歴史の蕾

歴史の蕾であると自信が強い人は家庭的であることを意氣地なしのやうに思ふのですが若さを失はないうちに自分の血の臭ひを味はつて置かないと先へ行つてから、とんだ老人に追ひ越されます。しかしこれからの人々は相談しなくなつて一つの動きをもつのですから、個性的であることは個體でないことを心得てゐさへすれば花は咲いて行くのです。けれども生活の様式はもう建物から變つてゐてよい筈ですから三角形の地下室でも

かまひません、それぞれ建物をするがよろしい。お庭では、野菜のやうに、新鮮で淡白に匂ふてゐたいものです。



## 一一、陽の下での二つの立場

眞黒な紙を天から下げた闇の眞夜中に電柱の根下の北隅でささやくのであつた。

——あら！、私の頭にかぶさつて、お雪さん！、まだしつこい、おらつしやるの、邪魔ぢやありませんか、私たちが頭を出す頃はもう春ですよ、何を死にそこねてゐるんです春は時代ですよ、いつまでも自分の時代だなんて、見當違ひのことを思つてゐらつしやると、折角の全盛時代の力も名も臺なしに汚れてしまひますよ、時代！、何んといふすばらしい裁判でせう、時代を知るものこそ「生」の意味をもちます、やゝ時をとりちがへてゐますね、ごらんさい、未來のある梅はもう散りかけてゐます、時ですよ……

何時までもしやべり続けさうな青い芽の態度を見て辛抱しかねた消え残りの黦んだ雪は

——幾世紀もあると思つて、さう言ふあなたの執つこさは、去年の秋の暮、何んと言ひました「私はもうこんな干からびた、うるほひのない汚れきつた世の中は、こちらからあき／＼してしまつた、周りが死ね／＼と言はなくなつてこちらから御免です、二度と生れて来るもんですか

お雪さん、不用な旅行だけれど、これで最後のお別れです」なんて如何にも死の憧憬者ぶつて——私たちの仲間の優勢になりさうなのを皮肉つて、避けられず、絶対に枯れ行く姿を——如何にも自ら求める道を歩むものらしく土下座になつたじやありませんか、それを！、それを！、如何に春が来たればとて、亦おめ／＼顔出して私を邪魔物扱ひにしなくなつてよいぢやありませんか、今頃古い動機論をもち出すわけでもないですが、わざ／＼私はあなたの頭の出さうなところを選つたのでもなし、あなたこそ死骸のやうな私の倒れてゐるところを、ことさら選つて来たのではありませんか、いゝえもう分つてゐます。あなたの生と、私の死の絶対です、ちつとは哀れんでも下さい、塵に汚れて、人間の誰人に顧みらるでなし、先程小犬が一足私の側へ来て何んだか鼻で物を言つて行きましたが、おそらく私だといふことは知らずに行つたでせう、センチメンタルな詩人さへこの汚れをみては相手にしてくれないですよ、私はあなたの死際を思ひ出して見て今の元氣は呆氣にとられてしまひます。

——馬鹿な泣きごとを言つてゐるじやないか、別荘が工場になるだつて冬の次は春だよ、まあ時を無視する哲學觀があらうとも馬車は馬車だよ、冬の休暇だ位に思つて身分證明書を懐へ入れるんだ、時代は身分證明書通りに行くより仕方がありません、あなたの悲哀を買つてあげる



金もありません、只一つ方法があります「あなたの子孫の時代を祈る」ことです。

——時代の違ふてゐることは此の灰色の家をみても分かります、だが、あなたの全盛期へ乗り出す春の第一歩には、あなた自身の哀れな晩秋の悩みは思ひ浮ばないでせう、最もなことです。あなたの伸び行くための陽光は私にとつては死の宣告なのですが、時代の違ふことをお忘れなようになさいませ、年中春でもあるかのやうに思ふ存分生くることの尊さを味ふがよろしい、もう頼まないかぎり態度をはつきりしてをきます。あなたが生きる強い力で丁度都合悪く、それも死に残りの私の下へ伸びて来たまでのことなのです、けれども形としては如何にも私はあなたを抑壓してゐます。伸び行く陽光の糧を妨害してゐます。それを真正面から意識的な犯罪行為として責めつけられてはたまりません、私だつて早く後進のあなたに席を譲つて温い陽光の恵みをあなたの専有物にして上げたい位のことは知つてゐます。だつて、さあ今死ぬのだとなると「一思ひに死ぬ」のだといふよりは「只の一時でも、おめくとも長く」そんなけちな心も浮んで來ます、でも死期の近いことはあなたにも私にも分つてゐることですから生あるうちは只の一瞬でも氣もちよく語り合つてゐただけでせうか。

——さうやさしく出られてみりや無理にがんばつてもゐられません、私は生くることの一筋に

向つて突進してゐました。成程私にも秋の哀れはあります、あまりに生くることのみが強く過ぎて去年の暮の悩ましさを忘れてゐましたが、今春になつたとは言へ、消え行く君の心のやるせなさを知らぬといふことは、生くるものゝ忘れ勝ちな恥づかしさです。私の伸びる陽光は、君への毒杯に相違ない、或るものゝ生が或るものへの死であることは生物界での一大悲劇で——ここにこそ藝術も宗教も生れるのだと人間どもは言ふのですが。

——もう未練はないのです私は死の哲學を記録しやう、君は生の藝術を發表して呉れ。それきり、ささやきは東の空の白む空のうちに消えて行きました。

青い芽は無意識に東に向つて伸び上りました。

黴んだ雪は黙つて青い芽の様子を見てゐました。

あんなに親切に言ふては呉れたが、あの意識的な生命の力はどうだ、生くる力の強いものゝ行動は他目にはあんなにまで排他的に見えるものか、俺の仲間はまだ消えてしまつた。俺だつて他



の仲間の様に明るい世界へ走り歩いたら長くは生きてゐられなかつたのだ、誰からも忘れられてゐる電柱の北隅の暗さに生きてゐたればこそ、今に此の世に居れるのだ、塵や埃に本性を出さないからこそ齟んで喘きながらも生きて居られるだ。

陽はかん／＼と照りつけて世間は明るかつた、明るみへ進みつゝあるものは鳥も柳も自動車も興奮の生みつけである、世は「行動で満たされてゐる」  
現代性の爆發だ。

赤い陽の沈む頃自由のたそがれが薄暗と共にやつて来た、暗の淋しさは細肥の組織を變更したやうに物狂はしく青い芽は手さぐりに友を探し出した。

陽の沈んだ世界では、敵にしる一つの話相手が欲しかつた憎み切つた雪が戀しくなつた。

「生くるとも、ひとりほつちは現代性を缺いてゐる」  
青い芽は闇の世界に腕組んだ。

陽は、赤い陽は、生を育くむ熱の陽は、その翌日も昇つたその翌日も、その翌日も機械の如く昇つた。



## 一一、技術學

### 1 技術者の感覺

教育は先づ教師が奴隸となることだ、そして無知の民衆を思想的に尊敬して組織することだ。行動を組織することによつて経済的な剩餘と時間的な剩餘とを彼等のものにしてやることだ。所謂教室での教授は教科を一日に二つとして

午前中で打ち切らねばならぬ、そして

午後は生産労働が遊戯そのものを學習するのだ。

受納と表現とを一元にみる學習でなくてはならぬ。

二十坪の箱は四時間二教科の思索場としてのみ許されてよい。

奴隸學を行動する教師にあつては

自ら生産労働に従事して、兒童と共に先づ最初に經濟と時間から教育を可能ならしめるのだ。

それは技術者になることだ。

今の教育で最も不足してゐるものは、自由でもなく常識でもなく、冗談でもなく塵拂ひでもなく技術である。

過去の文化を學習するにしても工場と農場で活動することによつても會得せしめやう、まづ時間割と教室の變更をせねばならぬ。

それどころではない手落は、もつと新しく

感覺を生かすことである。

教師の感覺がすべて今は死んでゐる。人生は感覺なんだ、煙草をのむにしても止めるにしても、もつと青々してゐなくては身のそなへに穴が出来る。

耳を變な石拾ひのやうに使つてゐないで石投げに働かせるのだ。

鼻なんてものをまるで文化人の骨董にしてゐないで、鼻は經濟的剩餘を創り出す器官として働かすべきである。

目は却つて皮相に敏感すぎる、もつと時間的な餘裕を與へて社會學の原理を捉へさせねばなら



ない。

感覚は舊教育可能の資格から一段の力を認めて、より高潔な發動機とみてよいのである。職業は先づ感覚だからである。教育は教室から脱出することによつても可能である。(私はより教室を尊敬する故に)

兒童の感覚は就學前に於てその本性を本原に出してゐるのに、感覚の古い教師は、その本性を教室や廊下で整理してしまふ。

すでに感覚の力を知らない教師であるからだ。

工場や村落はどんな目をみひらいてゐるかを知る感覚の教師でこそ兒童の友達になれる。

生活様式などといふことも感覚で整理するがよい、最も獨創的な文化様式は感覚表現によるのだ。

お寺がクラブになつて本屋が公衆圖書館になることは一つの感覚の移動である。庄屋の骨董は若主人によつて村の財産になつて感覚は明るくなるのである。歴史の實驗によると感覚の伸展力によつて文化を社會組織中にくん／＼生かして來てゐるのである。社會の意識は感覚にたよるところが多いのである。もう一度感覚が世に出ることによつてすべての消費が新しいものを生んで

行くのである。

## 2 教育も消費である

教授要目から教師のすべてが消費されることが教育である。

素材が素材である限り創造はないのであるから、教育の形成は教材と教師の消費である。教師の感覚は消費によつて生きて行くのだ。

教師は教室に於て毎日消費されて行くのだ。消費は労働を一原理としてゐる限り學校は労働しなければならぬ。

労働とは表現のことである。

## 3 型からの亂射と個性

兒童の活動は組織を出發點とするものである。

組織の學習によつて知るのである。

今の學校教育は學級教授であることを教師も兒童も頭から失つてゐる。



個性とは組織の上での特殊である、然し眞の組織は組織に居らないことであらうから一見個性は孤立の觀を呈するも、尙眞の個性は組織のうちに淡く流れてゐる方が却つて生きてゐる。

公立學校の組織の整つてゐることは、組織へ叛逆したであらう程にみゆる私立學校が、どんなにか組織を欲してゐるであらうかと一般に組織に執つこくてはならぬ。

組織の最上なものは建設破壊の矛盾理を深き「一」とみるところにある。しかるところに内容の特殊を肯定すれば、個性は輝くのである。歴史を生む個性者であれば即ち神の内容を素材とする意志の人である。個性が人格の根本である所以もこゝにある。

個性尊重の教育程社會的であるものはない。組織中での型からの鍛錬こそ個性を輝かせる。型こそは共有の素材であつてそこに各自の内容をもつのが個性である。

私立學校などが個性を重んずるのも此の邊の基調に觸れてゐなければならぬ。

組織を意識し過ぎてゐる公立學校に、あきたらない故の出現である私立學校は無論全くの放縱であつてはならぬと同時に公立學校は特殊即普通での色彩を自由にせねばなるまい。

學校とは受納するところであるといふ氣もちの多い中に綴方の機能を論じてみたいのである。

殊に新しい教育者の中に「綴方即生活指導」であるとする人の多いのを變に思ふ。それは流行への無自覺な教師の放縱的貧弱さである。

#### 4 綴方機能は表現である

受は現である、受のすべては現でないにしても現のすべては先づ受であらう。如何に理知的な認識であるとは言へ内部の感情に結びついて多くは外へ投げ出される。大まかに生活が綴方に現れることは勿論だが、それがために綴方は生活指導であるといふ流行兒の——それは却つて綴方の行き詰りを告白してゐる。(私ははつきり受は現だといふ。)

よい生活がなければ、よい材料は生れないといふ事は綴方機能——表現指導論の私にも分かる、けれどもその論理から、「綴方は生活の指導」であるといふことはそのまゝ賛成は出来ない、「修身は生活指導である」「讀方は生活指導である」即ち教育は生活指導であるといふ範圍でなら私にも分かる。ところが「修身は教育に關する勸語の趣旨に基きて兒童の徳性を涵養し道德の實踐を指導する」といふ立場と同じ立場に立つて「綴方は生活の指導」であるとはどうしても考へられない。

生活指導論者は言ふ。



リンゴのことを綴った兒童に、

——なぜもつと毎日の暮しに直接用ひてゐる草履のことを書かないか、と。

嘘を言ったことを綴った兒童に

——その生活はよくない、嘘を言ふとか、喧嘩をしたとかいふことは綴方の材料としてはよくない、それはあなたの生活がよくないからです、もつと綴方の材料になりさうな（強いて言へばもつと道徳的な美しい）生活をせねばなりません、と。

成る程それは教育ではあらうが、綴方の機能ではない。リンゴを綴ったがよいか、草履を綴ったがよいかは綴方の機能では決してない。只

リンゴを綴るに

1 赤いももだ、きれいなももだ。

2 僕は手でさはつたことさへないももだ。あれが食べられないおもちゃであつてほしい。

3 神様の眼から出た涙のやうな美しいリンゴ。  
草履を綴るに

1 雨降りに祖父さんが目をこすり／＼作つた草履です。

2 自動車に乗つてゐる人々がポケットへ入れてゐる小判を私は毎日履いて草取りをするので

す。

3 神の作つた同じ草履を私は足に履くのに別荘の子供たちは財布に入れてゐる。

この綴方をみた生活指導者は日常親しみのないリンゴなどを綴るから(3)のやうな空想の綴方になつてしまふ。草履を描け、草取りを描けといふ。しかしそれは綴方當面の機能ではない、綴方ではリンゴを描くもよし草履を描くもよし(1)よりは(2)の表現がよいのだと指導することである。草履を描くにしても(1)の如くならリンゴの(2)(3)方がうんとよろし。と、その表現についての鑑賞批判の目を養ふてやるべきである。

綴方の表現は多く美的なものとなるから藝術的な態度となるではあらうが美のみを綴る対象としてゐない。

即ち純藝術は絶對的自由の形式に於て自らが神の立場にあつて一つの世界を創造して行くのであるから一見崇高には見えると同時に兒童のすべてがさうした美を対象とする活動は出来ないものである。けれども表現指導の形式としては方向を其の方面に取るべきであらう。

立派な表現をするには鑑賞も批判も意味がある。



或る「美しさ」を感じ「正しさ」の評価にまでぶつかつて行くのであるが、

——内容の正しさが綴方ではない。内容と形式(表現)の合一が批判されてその象徴の程度をこそ鑑賞すべきである。

生活指導者はその内容の正しさのみ批判の目をむけてゐるのではないか。

#### 表現過程(綴方の学習訓練)

綴方の機能を「表現」とすれば——そこに表現欲がなくなつてはならぬ、そして表現欲とは對象認知以前の存在であると見た方が論理的にはすなほであらう。その力の存在へ偶然に必然に動機が觸れて活動を起すのである。

動機とは普通、目的の表象と感情とが結びついたものであらう。故に綴方として活動を起すときは目的へ向つての意識集中がある。表現過程の第一は目的の成立である。こゝまで来ると論理の當爲は腹案を要求する(實はもつと無意識に近い直観があるのです)腹案は思想の主眼を認定して思考に入るべきである。こゝで綴方学習訓練の分野が了解される。

「目的への意識は必然的存在」であるから生活指導者の言ふが如き訓練は綴方の機能ではない。

只思惟の當然性への心づけである。腹案への訓練は教師の立場としては「文話」の必要が存在する。

要するに表現過程を通じての学習訓練は

#### 1 目的の決定

2 記述の範囲決定 目的の決定はされても其の範囲を決定しないと、最初の一筆がうまく行かない「文の起」位、文の全體を左右するものはないから。

3 記述最中の聯想作用が常に目的表現に向つて統一されて居らねばならぬ。

4 記述後、其の文の價値を反省すること

即ち目的上より表現、機能を十分全ふして居るや否や批判せねばならぬ。こゝに推敲が出現する。

推敲 とは目的を果したかを考へることである。

推敲はその文にとつては消極的なものであるが次の創作への力ともならう。

#### (1) 共同推敲



我内を眺めるより外界をみる方が感覺的であるだけでも容易に行はれやう。他への批判は自己優起ともみれるが自己を客觀のうちにつける自己存在で一つの鑑賞ともなる

(2)自己推敲は自己の表現へ對する反省的判斷であるから低學年にはむつかしい、表出された我へ表出した我が反省することである。そこに理性の力、感情的全體感からの批判力を人間力のうちに豫想しての上の肯定である。

何れにしても推敲は表現形式への作用です、目的をよりよく表現せしめんとする活動への助力である。

そこに「表した意味」と形式との関係をみなくてはならぬ。美意識とでも云ふものがあれば鑑賞も生れるわけである。對象中に自己を没入して主客の對立から離れて、しかもその中に自らは生きるのである。

しかしある認識は表現され推敲批判鑑賞されて人間思想の發達となり品性内容への交渉となり所謂人間的な歩みとなることはどこまでも望ましいことであるが、それが綴方の効果であるにしても決して生活指導者の言ふであらう如き綴方の機能ではない。

綴方の機能とその過程が分つて、實際上、自由選題で行くべきか課題で行くべきか。

#### 自由選題と課題

文章としての表現活動は、一つは自らの表明であり、他の一つは外からの餘儀なくされた場合とある。

發現せんとする思想感情を内に止めて居れば不平衡の内亂が起るから、その原因をなくするには發表の他はない、かくて人間を伸展させるならば綴方は教育上なくてはならぬ存在理由を認めると共にそれは自由選題でなくてはならぬ。

自己の思想を自己の文字で表現せんとするならば動機から見ても心理的にも哲學的にも自由選題であるべきである。

しかるに、表現能力は先天的であるにしても、何物かの外界からの刺戟に反應することから表現が始らねばならぬ。即ち人間は潜在能力としての可能體である。して見ると多種多様の刺戟を與へてみることは——各自が如何なる方面の表現能力に勝つてゐるか確かめつゝ尙發達を助長



することになる、こゝに普通教育の如き児童を取扱ふ小學校にあつては綴方を課題的形式による内容の自由といふ内面的根拠がある。

綴方の生活指導論者こそ課題的に内容を強制指導し得るであらうが、それにしても表現が綴方である以上自由な自己表現によつて自己を客観に投出せしめて——そこに自己を理想的に象徴するやう指導をせねばならぬ、内在してゐるものゝ切り換へではなくして、その象徴化された表現こそ綴方である。

實際は自由選題であるか課題かといふことは問題ではなく教師が生活を指導するか表現を指導するかの態度の問題である。

160

#### 文話

綴方を教師の文章観と児童の文章観との交渉であるとするならば、教師の指導範囲は文話につきると言つてもよい程である。

#### (1)文章とは。

赤子の泣くのは音を出すのではなく、或る表現であり要求であらう。散歩をするときや、使ひ

歩きするとき、ひとりでに口笛を吹く、人の話を聞いてゐるとき、悪るいたづらをするため  
でなしに手を動かしたり顔の筋肉の様子を變へたりする。人は「心の中にあるものを、どう  
かして外へ出さうとするし自然に出ることもある」それが繪となり唱歌となり彫刻となり文  
章となるのだ。

自分が朝寝をして叱られたことさへ友達に話したくなるのだ、この心の力が文字によつて  
現はれてくるのだ。

#### (2)よい文

今、かうして澤山の人が並んでゐると顔の形は無論、着物も同じではない、どんな心でゐる  
かはそれ／＼である、先生の話をきいてゐる人、昨日の釣のこと、うちの子供のこと、お祭  
のこと、放課のこと、それ／＼思ふてゐるのであるから、文は心であると言つて綴方は一つ  
として同じものはない。

A、寒い寒いと思つてゐた冬がいつのまにやら行つてしまつた。と書くよりは

B、なんだあんなところに猫が眠つてゐるな、もう朝から瓦の上に日向ぼっこしてゐるのか、  
いつまでも灰の中にくるまつてゐられないと見える。冬に行つたのも知らずにゐるのか。



とても書く人が級中に一人位はあつてもよいのです。

C、待ちに待つた運動會が来た。これでは甲乙丙誰が書いても間違ひではない。

D、俺の足は傷を忘れて運動會の日を明日あさつてと指を折つた。

その人だけにしか與へられない文の言ひ方があるはずです。だからよい文は一度自分の心の網をくぐつて出てゐる。人まねでもよい只一度でも自分の心網をくぐらせねばならぬ。

(3)描寫 どんな人がうまくなるか。平凡なあたりまへのことに心が不思議だと思ふ人です、赤い花はなぜ赤いかといったやうに。それと

自分はだめだとあきらめないことです、よくかみしめて他の人の文をみるのです。思ひきつて一つをねらつて書くのです。目の前に浮ぶやうに書くからと言つて、人の顔には目が二つと鼻が一つありますでは困る、それも面白い場合もあるけれど、可愛想な人だ、淋しい日だらうらしい日だ、と書くだけでも困る、そこには一つの技巧があるのです、技巧の最もうまい人は、文の山なぞも時々考へるし、バックもあらうし、結びもあらう。

小さい子の言葉や文にいやみのないのは技巧がないからだとも言へるが大人の文に傑作のあるのも技巧のおかげである。

最も個性なものがよろしい。

三つばかりの男の子が毎朝焚きたての御飯でおにぎりを二つづゝ母からもらつてゐたのです。或る朝、母が——おにぎりはいくつですか、と氣なしに尋ねたのに、此の子は、數の言葉としては、ヒトツ、フタツ、ミツツと數へ方を知つてゐたのではあるが具體的な數になつては二つより多いのは三つであることを知らなかつたのです、そこで、しはらく苦心の上げく、——一つたべて二つほしい。と、言つたのです。

何んと生きた言葉ではないか。知りもせぬ言葉で「三つ」といふよりはどれだけ生命的な技巧であるかを感じさせられます。

綴り方兒童の人間的な育ちのわかるものはない。兒童の表現能力を伸すとならば教師自ら創作を試みるべきである。

## 5 白壁と壁虎

こんな晩だ、蚊帳は机を守る、私の耳は藁壁の向ふが見える、土靴で瓦の上をミシミシ風が通ると、壁虎が白壁に腹をすりつけて塀越しに私をにらむのだ。



銀の蛇が私の窓を縫つて隣の土蔵の中に躍り込むのだ。空は眠りをゆすられて闇を吸ふように働いてはゐるが星眼一つあかないでゐる。

私は小學校で理科の時間に見た骸骨に——(全身の骨格をさう言つたのだが)、紙をはつたやうな胸をなぜながらこの嵐の路を雨の丘へ行かなければならなかつた。

町を離れなければ私の病は治らないといふのだ、雑木林と畠との間には二三十軒立ち並んだ田舎町でも私の身から血を吸ふのだ、どうせ死ぬのだと思ふが——最後に一度の白壁が遠い丘から眺めて見たいのだ。

白壁は五町以上離れないと酒や女の臭ひがしていけない。

あたたかい動物の胎内から出た蟲は一時酒と女の臭ひを忘れるのだけれども、親くさいぬくみの放散するに従つて再び白壁の臭ひが全身をとりまくのだ。

通りである。

ふと飾窓をのぞくと値段札が半分に切りたくなつて、どうすることも出来ない汗じみた手を握りながら寢床については慾望を硝子窓の中へ置き忘れて來た残念さに毎晩寝つかれないのを手初

めに

こちらでは土足の男が酒に酔つてアスファルトの上に倒れてゐると、そばの路次では空車が退屈さうに咳をしてゐる。

空地の倉庫には、ついぞ人影の見えたことがなかつた。と言つて高い窓は明いてゐた。

口數の少いお浪が倉の中で母と二人で暮すのは魚の水中と變りはないが夏の暑さでは、倉の窓々を閉めきつて一つの穴から水を注ぎ込んでほしかつた。

——こんな晩だね、泥棒の入るのは。

母は入るのを待つてゐるようだ。

——違いますよ、近頃の泥棒は月夜よ、ドシャ降りの泥棒は開業始めで、先方が震つてゐるんです。現代の泥棒は月夜で、強盗は日中なんです、私それが分つてからもう女學校がいやになつたんです。うちの父様だつてこの倉をお建てになつたのは月夜の泥棒なんです、その罪業は一枚上の日中の強盗に本宅をとられて、つい命までとられなかつたのでせう。それで私たち母娘はこの倉が住居なんです。



——で、お前は金もちが好きか貧乏人が好きなのか。

——工場の隣の貧乏人よ。機械のガシャ／＼で現代人の對話の開えない程の處で人間の生活が  
感覺してみたいのです。現代はもう音と速度の時代ですよ、ね、母さん私、一つそのこと之の  
倉を工場にしませうか、そしたら隣りへお嫁入りしますわ。

——肺病の嫁にか？

——いえ、工場の隣の息子よ、それにしてもあの方は明るい生活よ、雨だつたらきつと外出な  
さるわ、現代人の散歩は雨の日に限ります、日中の強盗以上にモダンだよ。

——年はとつたが、私も教育されて、ブルジョアではモダンな生活がなくなる時代を百年先に  
想像はしますが、肺病の嫁になりたい新しさを知りません。暗い天井なしの倉中の生活を（蜘蛛  
蛛以上に）新しいクラシックとしての現代生活に認めます。

——お母さん、現代のブルジョアに金があるなどは決して眼のあるものは信じてゐません、  
だが、この白壁が悪いのです、遠目に輝く白壁を労働者は怒るのです。

お浪は梯子に上つて窓へ首出した。雨の自然は緑をつらねて紅い丘を前に据えた、雨の霧をす

べつて来る工場の響はお浪の父の命を象徴してゐる。プロレタリアの勝利はブルジョアの移動に  
過ぎない。

——母さんここへ上つてごらん、私の家が見えるから。

やつと街を出た私は青田を縫つて雨の丘へたどり着いた。私は突然倒れた。

——さうだ窓からの視線が私の足をすくつたに違いない。でなかつたら私は心臓をえぐり出し  
てあの白壁に投げつけるつもりだった。

私は今日程よ、その白壁の遠望を味方に思つたことはない。

## 6 街の目玉

三年も住みなれた魚の町である。しとやかに私をかばつてくれた若い男と、五町と離れない雨  
の丘へ二人で上るのである。

二人で見えてゐる折角の青空が飛行機の音で濁る。目を落すと町だ。魚の臭ひはバラ色に鍍金だ  
けはされる。電車は細長く土地を食ひ砂利は飛んで魚の網を破る位だ。



—ね、先生。若い男はいつも私をさう呼んでからつづけるのでした。

—私は日が暮れかかると小鳥のやうにばた／＼戸迷ふのです。たつた一人の父親にさへ見そこなはれるのです。もう四五日になりませうが、私の家の戸口へ若い娘が蟻のやうにたかつてゐるではありませんか、私の家には砂糖のやうな男と鹽髪の男とゐるといふのですから。つまり娘が澤山のぞくつはあやしいと言ふのでせう。

お笑ひ下さい、月の庭に夏蜜柑でもつるしたやうなランプが見たかつたのです。

たつた一軒の油屋です。油の賣れなくなつたことに憤慨してゐる父は、私を見がてらにでも油買ふ客の増へるのを願つてゐるのですけれど。

デパートだつてシヨウウインドウだつて父に言はせりや電車以上の敵です。魚の町が機械文明によつて育つ生物の雛であるとする、その眼玉が、五十觸や百觸なので。

—だつて油屋の門燈は電燈ぢやないか。私は口切つた。

—それだけは父の世間への義理です。門燈まで、いつそ油ランプにしたら、もつと娘が奇つてくれませう。

—だが今日では油ランプは危い玩具だね。

私はすぐ若い男の父の姿を思ひ出すのであつた。物心のつき始めた娘のやうに窓邊にぼんやりとよりそつてその顎の白髪が、頭をちぎられたとかげのやうにしつほでふるへてゐよう。

—それでなくてもあなたの將來は考へものです。

二人はだまつて魚の町の化け姿を丘からみつめるのであつた。

眼玉の魚の町は手をつないで夜まで成長をつけてゐるのです。

斷髪の地曳網、ポマードの帆船、バラ色の鯛は絹網に抱かれて市場まで自動車なのだ。

—だからせめて名古屋位へは出たいと思ふのですけれど。そりや父も此の町で職業を變へることはいやです。今までは意地を通り越して、油ランプを詩的に享樂してゐるやうです。

—だがあなたは一日も早く都會へ出たいのでせう。今日では都會そのものが生物ですからうつかりすると體まで食べられてしまふでせうが。なかに、あなたなら食べて行けますよ。

—カフェーの食卓の脚位にはなれませう。男だ！ 意地さへなくしさへすれば却つて向ふは男として使つてくれませう。婦人の靴下の生活はなんでもありません。

河岸沿ひに白い倉庫が並べられて空地につゞいてゐる。それに白山神社の崩れかゝつた石垣で



かなりの土地を占領されてゐる角を曲つてやつとみつける家が、お互寄りかゝり合つてゐる。別に職業らしい店は見つからぬが、それでも戸口を出る若い娘の手に鱗がついてゐる。

通りまで走り出てはショーウィンドウで姿見をするのが朝化粧であらう。

硝子張りの家の裏町には日蔭者のやうな、尙儂の町のあることは郵便配達も知らない。

せむし町のおてつさんは日中はとんと表へ出ない。

噂の姿は中肉だが腕が不似合ひに太い。髪は眞黒で、七分三でも、オールバックでもいて、いふ返しでもない、無難作に後で困りものゝ始末のやうに束ねてある。目つきと口もととはどうみても無邪氣な日蔭ものだ、無教育だとは言ふが小説を読むことだけは女學校出だといふ。

あはてた歸りの漁船さへ氣をつけるといふ河口に菰包みの死體のあるは人の心をしびらしてゐる。それにつけ込んだでもあるまいが、入水者の噂もないのに菰包みのあるのをみつけた一人の漁人は何氣なしに一寸足蹴にかけてみた。

——おてつさんが菰包になつてゐる。

雨は風の來ない前に舟を河岸に縛つてしまふ。仕事を取られた海の若人は、しめつた藁敷の室

へ追ひ込まれた犬のやうに皆して吠えるのであつた。

——おてつさんの菰包を蹴つた奴は誰だ、それ丈でもそいつが一番幸せものだぞ。おてつさんは、目つき、唇、爪の色、何一つ男を受け入れてはゐないぞ、長い談儀の話のけぢめが、おてつさんは油を買ひに出ることだけはすると、言ふのだ。

——撲つてしまへ、家へ乗り込め。といふ圍取になつても後は焼芋でもかぢる位が豊年なんだ。だから私たち二人は登るのだつた。雨の丘である。丘の上の凹みは硝子張りの池で。さつきから海上りのかれひを泳してゐるのであつた。

——此の魚はまるで水平と直角を嫌ふ板ですね。だからと十纏と同一角度には。

——でも高さには鈍の魚でせうか、ここは丘の上ですよ。いや魚の生活にはそれは unnecessary なでせうね。

魚は投げられた圓板のやうに淡水を切つて泳ぐのです。故郷の畑を離れた感じを見せない魚は二人をすつかり捕へてゐるのです。

——それにしても一握の鹽が効を奏したとでも言ふのでせうか。

——潮の模造品が丘の上で海の水以上に働くことは斷髪以上のモダンだ。あなたの都入りする



位の意味はありませんよ。

——先生、思ひ止まつた私にその言葉はひどいでせう。

——私も丘遊びのお仲間に入れて下さい。

おてつさんがバスケットをさげてゐるのでした。

——その中は薯ですか、

それが私の返辭でした。

若い男はだまつてそのバスケットを横取りの形にひき取つた。おてつさんはニツと笑ふのであつた。

172

——おてつさん、上出来だ、今日の獲物は。

私の聲がバスケットを開けると若者の腕を巻いてゐるのは章魚の足でした。

章魚はしばらく丘の池で水底を這つてゐました。ぬつと水面を切つて空中へ逆立した。

——それごらん、私の考へ通りよ。

章魚が海にゐては本性を出さない。

章魚の足は、丘の上では

怒つた犬のしつほ、猫のしつほ。

これなぞまるきり、ライオンのしつほそつくりよ。あなたなぞ名古屋へいらしやつたら、それ

こそ丘の上の章魚ですよ。ね先生。

娘は私に同意を求めて來た。

いや章魚が章魚らしくなるのは海を戀ひながら海を出ることなんだ。

折角靜かになつてゐた若い男の血が逆流しはじめた。

三人の心は海の魚を丘の上にもつて來て、黙つて生かして平和をつとけてゐました。

若者は公園を歩いてゐる。すみつこのベンチに床をのべる。陽のあるうちは若者を見のがして通るもの。

ヘルメット。黒い靴、アメ靴、バラソル。ステツキ。

太陽が若者をしばつて留置する。ポケットを探る。それでも一本の火のない煙草を闇の中で噛みながら、幻影が往來する。父は一人の息子に逃げられた淋しさに門燈まで油ランプにしてしまつた。翌日、町の反感に追ひ立てられておてつさんが公園へ迎えに來る。

173



——三人で油屋へ行かうじやないか、お父さんに會つて話をしませう。それがいい。私は云ふのでした。

——僕は左手におてつさん、右手に先生、それに父を背負つてお伽の國へ行くのです。僕の必需品はこれ以上ないのです。

——でも仲さん、かび臭ひ私たちは丘の上で静かな論戦を享樂するゆとりがあります。

魚問屋の娘さんは今も忙がしく算盤をはちいてゐました。此の雨に金のある人々は私たちを使ふ準備のために叩かれてゐるのです。

——金といや、世は忙がしいんだぞ、それ要さんのあんまね、あれが魚問屋の掛取帳なんだよ。

近頃は魚は現金賣りの表だが、實際はうんと魚を食べる人間は金無しの子澤山で、月々流れさうな位どつさり借金があるんだ。

私は家を忘れて聞き耳立てた。

——魚問屋のおかみは評判の肩こりだろ、そいつを要さんがもんでゐるうちにつけは出来てしまふのだ。

月の三十日になると、いつも白山神社の石垣で調子よくカーブして目あきよりもすぐ道を歩くんだ借金の臭ふ家へ行つてつけを口で示してお主婦からもみとつてくるんださうな。見事に家を出るときにはきつと魚問屋の貸金を杖と一緒にぎつてゐるのが要さんの腕です。

停電

魚の町の目玉は門燈一つ。

おてつさんは、左の袂から赤い蠟燭を取り出して灯をつけました。

沖の人魚は三人の丘を眺めてゐませう。

## 7 教育の風景畫

A

知識は生物なのです。學校教育では教師自らの生物を生活させてゐればよいのです。兒童の内なる生物が群をなして私を包んでゐてくれれば上々なのだ。

小さな砂粒にでも目を注いで自分の知識を種々専門に掘り下げて生かすのだ、博士や大學者を



尊敬すればする程、永久に何人にも開かれなからう境を歩むことだ。それは當然個性の問題に觸れるのですが、個性とは自ら意識すべきものではないのだ、磨かうと意識してその方向に必ず磨けて行けるといふ程度の安價なものではないのだ。それよりも個性とは行きようのない窮屈な必然の方向かも知れない、それが只努力によつてその道が辿れ得るに過ぎないもので、教師や親が今から決めてやらう程の特徴などといふものではあるまい。圖畫が得意だ唱歌がすぬけてゐるなどとは深い個性そのものではない。低脳視されてゐる算術、近視であらう眼、びつこであらう足、叱りの舌そのまゝの力をも借り受けて、自分にも——これぞと意識されない全力の活動によつて伸び行く姿こそ個性の色彩、個性のひらめきである。

酒のみの青年が教へ子であつたら、共に飲みつゝ——訓誡を必要としない態度の會話や行爲のうちにあつてこそ彼の個性は酒を飲まなくもなるであらう。個性者には個性の色は分かるものではない。教育に眞の個性の色彩の出でゐる筈のものは案外平凡ではあるが所謂コツが出てゐよう。コツとは純理が實際にびつたり合致してゐることが感情的理解にまで進んでゐて所謂普通での論理的な理解の無力であらう様子を示す。

言葉の程度が敬語のきこちなさから下りて平和に兒童と教師との間に交はされることはうれし

いことだが、それでも尙兒童の個性などは出てこない、兒童お互同志の心易さといつても、所謂くせが露出するだけのことが多い、それは兒童自身が内を靜かにみつめる程のゆとりに対座してゐないから。

それよりも知らずに個性をひらめかしてゐるものは彼等の綴方である。

摸倣も、内省も、實寫も、象徴も、彼等は個性をかくさうともしなければ鋭角的に出さうともしない、しつとりした靜けさの中に各自をひらめかしてゐる。教育が若し個性を引き出す仕事であるならば、教師自らが己も知らないで個性をあらはにすることにである。そして兒童の綴方を見れば、個性がどの程度に尊重されてゐる教育であるかの見當が、第三者に分かる筈である。兒童作品のうち教師自身の内心の聲がするであらう、教師は兒童の作品を批判する前に觀照するの必要がある——作品中に自身を手厳しく直觀するがよい。

「兒童のためだ」といふ美しい言葉にかくれて、一舉一動を模範的にするべく兒童の存在をあまりに意識しすぎるのが教師の態度としてはあまりに多く——それは教育を毒してゐる。紙屑を拾ふにも便所の下駄を掃へるにも兒童の見てゐようことなぞちつとも欲しないで、只そつと、ひとりの時にする態度こそ、一見教育的でない最良な教育である。



理想をもつて教案を立て、教科書を手にして立ち、壇上では尙更その瞬間から「兩兒童のため」などといふ氣もちを抜きにしなければならぬ。

濱邊に遊ぶにも、山に登るにも、畔路を辿るにも、兒童の個性を識らうとする野心をなくすることが肝心である。教室以外のゆつたりした濱に山に青葉の陰に自分の書齋へ——兒童の個性を識らうために誘ふことすら効果を示さない、理想と組織をもつ學校であればこそ、偶然に海邊で砂をいぢり、偶然に赤土の辻路で出逢ふが教育であり、機會こそ神であり意味であり教育である。知識は動物であれ植物であれ生物であるまでに彼等兒童のものを生かしてやるが教育で、それにはどうしても個性を歩ましてやらねばならぬ。

兒童は兒童、大人は大人の世界のあること事實だが、教師自身自分の内部をみつめれば、兒童の個性も深く洞察が出来て行くやうだ。作業主義の教育などの必要は勿論であるけれども、行動そのものを習慣づけなくとも、彼兒童の心が認めた如く教授されたならば——そこには生物としての知識が育つて行くので、動くと言つても個性的な實行があるものだ。

その知識こそは人生を支配してくれる、だから教師も、「教育者なる前に先づ人たれ」などといふことは概念である。菓子屋となる前に先づ人となれといふ生活がどこにあらう、人たることが

が教育であり、人たんとすることが教育なのだ、生活の糧を得るためにする教育は不神聖なものだとも言へないこともないが、しかし生活者となれる程に物質も恵れるならば、それこそその人の教育はいよ／＼堂に入るわけだ。

だからこそ、自分は金がないから教育者にはなれない。又知識が足らぬから、讀書が嫌いだから、教育者には不適當だとは必ずしもあたつてゐることではない。

貧乏のままで、思索の足りないままで黒い顔をさん出して金も求め道も求めるがよい。只いけないのは——短所のあることではなくて、それを兒童も教師もつくろひ合つて對座することである。つくろつたものゝ對座はあかの探し合ひである。それでは教授の知識が生きて來ない。

眞實の自分を出して眞實の自己を出せることが教育の本道であるのは言ふまでもない。そこで眞實を出すには全人でぶつかることであるが、表現は有限の形によつて無限の内を出さねばならぬ故に、全體としての死相を出すより、むしろ部分を生かすことである。そこに象徴を尊とする藝術的態度がある、教育も一種の藝術である態度から私は教育を一つの技術とみるのである。圓を描くに圓をもつてする技術のまづさから遂には一畫一角によつて圓を描くまでの技術を教